

富嶽三寮
尾外
不見原

北村政徳の筆

新たな時代につなげたい

首長の条件

いま、町村長に問わねばならぬ

1998-11 ⑧

KUNIZUKURI TO KENSHU

国づくりの研修

【人物ネットワーク③】
加藤和郎／【地域連携がまち・くにを変えろ】
／【首長は後ろで目立たぬように指揮をとれ】／【母性を持ったリーダー待望】／【新たな時代の波をこえるリーダーシップ、首長像について】／【まちの個性をどう生かすか、どうつくれるか】／【新時代の首長に求められる戦略性】／【音の風景づくりに向けて】／【地域界を意識し、総合的なまちづくりを】／【二十一世紀の地域をデザインする七つのファクター】／【土と木・青べかとデイズニー】／【橋ものがたり・潜り橋】／【狭山池いまむかし】／【〇哩からの出発・太平洋戦争から新幹線まで】／【花の造園・フロリスケープの創出】

土と木③	34
青べかとディズニー 高垣陸城(日刊建設工業新聞社取締役企画局長)	
新たな空間づくりをめざして①	38
花の造園 フロリスケープの創出 川上幸男(京成バラ園芸(株)顧問)	
橋ものがたり③	42
潜り橋 松村 博((財)大阪市都市工学情報センター常務理事)	
狭山池いまむかし③	44
狭山池にみる土木工事(近世編) 有井宏子(大阪府土木部ダム砂防課)	
0哩からの出発③	46
太平洋戦争から新幹線まで 小野田滋((財)鉄道総合技術研究所主任技師)	
VIEW	36
『河川にもっと自由を』	
SPOT	37
国営沖縄記念公園	
施設ウォッチング②	52
港町の灯台「まなぼつと幣舞」 ～釧路市生涯学習センター～	
首長インタビュー③	54
『ホンモノづくり』への挑戦 機関車村長につづけ! ～宮崎県・南郷村～	
ひと・まち・未来②	56
水と緑・文化都市へステップ さらなる「住みやささ」を求めて ～東京都・小平市～	
KEYWORD⑥②	60
平成10年度 建設白書より ～次世代に向けて～	
日本全国、各都市・地域ウォッチング②	50
九割中流層がつくるそこそこ美しいまち ～八ヶ岳山ろくをみて～	
OPEN SPACE	64
紅茶でストレスを発散する方法 不思議、神秘、科学 居候ねこ	
BOOK GUIDE	49
『米銀だけがなぜ強い』 『会社人間はどこへいく』	

人物ネットワーク④	4
インタビュー 加藤和郎	
編著者に聞く	8
地域連携がまち・くにも変える 21世紀をひらく地域からの挑戦 谷口博昭(前国土庁計画・調整局調整課長)	
特集 新たな時代につなげたい首長の条件 いま町村長に問われること	
首長は後ろで目立たぬように指揮をとれ	12
亀地 宏	
母性を持ったリーダー待望	14
澤登信子(ソーシャル・マーケティング・プロデューサー)	
新たな時代の波をこえるリーダーシップ、 首長像について	16
田中尚輝((社)長寿社会文化協会常務理事)	
まちの個性をどう生かすか、どうつくれるか	18
立花恒平(赤煉瓦ネットワーク事務局長)	
新時代の首長に求められる戦略性	20
福田優二((株)電通総研チーフプロデューサー)	
音の風景づくりに向けて	22
丸山 亮(作曲家)	
地域界を意識し、総合的なまちづくりを	24
村上美奈子(計画工房主宰)	
二十一世紀の地域をデザインする 七つのファクター	26
望月照彦(多摩大学経営情報学部教授)	
対談 新たな時代につなげたい 求められる首長像	28
黒澤丈夫 (全国町村会会長・上野村村長)	
森 巖夫 (明海大学教授・全国地域リーダー養成塾塾長)	

国づくりの研修

第82号 1998.11

表紙 富嶽三十六景 尾州不二見原
(世界文化フォト)

edit & design. 緒方英樹/磯林久仁子
飛松尚孝/鈴木久美子



沖縄「海洋博」公園（本誌37頁）

提供・国営沖縄記念公園

リレー③④ 人と人の間に、時代が見える

人物ネットワーク

加藤和郎

平成十年八月十二日に



かとう・かずお

一九四三年生まれ。

株式会社NHK情報ネットワークチーフプロデューサー。情報化メディア懇談会「担当部長」。一九六五年、NHK長野局の時に「浅間山荘事件」を取材。強行救出一〇時間生中継とニュース映像で再構成した「軽井沢の連合赤軍」が七一年にカンヌ国際フィルムフェスティバル審査員特別賞を受賞（編集担当）。

八〇年、朝の九〇分ニュース番組「NHKニュースワイド」発足、以後六年間、総合演出を担当。「ゆくゆく年」と「つくば科学万博」開会式中継番組なども総合演出。八六年、衛星本放送に伴ない「ラウンドアップ日本」チーフディレクター、ソウル五輪・BSデスク、ウィンブルドンテニス中継・現地デスク、衛星「四時間スポーツ」「Be☆Sport4」チーフプロデューサーなどを担当。

九四年、NHK情報ネットワークへ。「J-FASスポーツと冒険の国際映像映画祭」国際審査員、「ミス日本」本部審査員、石川県小松市活性化委員なども務めている。

また、北海道新冠町では「レコード館」をプロデュースしたり、そのオープニング音楽劇を総合演出。「日本文化デザイン会議」や地域づくりに関する講師も多数。NHK文化センターで「映像塾」も開いている。

まずは、NHK情報ネットワークとは
どんな会社なのか教えてください。

NHKはラジオが第一、第二、FM、テレビでは総合、教育、BS1、BS2、ハイビジョン、そのほか海外向けの放送まで、たぶん世界一数の多い番組を毎日送り出しています。この番組ソフトやデータを活用したり、番組づくりや取材のノウハウを社会に還元して、同時にもたらされる副次収入を、再び番組づくりに還元していくこと、関連団体がいくつか出ています。

そのうちのひとつであるNHK情報ネットワークは、簡単にいうと報道局関連の会社です。BSニュースや情報番組、スポーツ番組の制作、映像取材、衛星による国際映像のコーディネート、さらに放送ノウハウを使ってイベントの演出や、ビデオソフトの制作、海外放送機関へのニュース番組の販売、情報化に関するコンサルタント・調査などを行っています。

異業種交流の場

「情報化メディア懇談会」はもう一つの顔として定着しているようです。

この月例セミナーは昭和五九年に会社発足と同時にスタートして以来一七〇回以上続いているんです。最初の十年はニューメディア、その後はマルチメディアをキーワードに毎回二人の講師をお招きしています。そのうち一人には情報化に関連したデジタル系の最新知識を、もう一人にはメディア一般に共通な文化・芸能情報、そのほかアナログ系の普通の知恵や知識につい

てお話ししていただいています。たとえば宮内庁の式部副長(当時)で、「歌会始」の責任者でもある中島宝城さんには、「短歌こそ時代を超えた情報です」と言って講師をお願いしたんです。

1、0、1、0の二進法が現代の情報化ならば三文字の組み合わせにより千年以上も尽きることなく生み出されている短歌は、日本古来の大変な感動デジタルだと思いませんか。そんなふうな、意外な人から意外な知識を学べるのが特徴であり魅力だと思っています。講演は月刊誌「I-Media」に掲載して、NHK各局や会員の皆さんに配布しています。

いま会員が八〇社。一つの社でお二人ずつ出席できます。青森県や石川県、大阪、新潟、長野などからも来てくれますが、やはり遠いところからわざわざ来てくれる人ほど真剣です。講義のあとのパーティーを「情報バザール」と私と呼んでいるのですが、そこで知り合った同士で新しい会社を立ち上げたり、商品開発をしたりする例が多く、とんでもない広がりを持ち始めています。

人をつなぐとどうなるか

出会いの場をつくることから人と人を
つないでいく。そういうプロデューサー
一的な職域につかれるきっかけは。

僕はもともとNHKに入ってからすぐにプロデューサーになったわけではないんです。技術職のミキサーに始まり、ディレクターに担務変更してから子ども番組や農事番組、ラジオドラマ

などを制作していました。その後、TVニュースの取材職に変わり、長野の局でカメラ取材やフィルム編集をしていた頃、「浅間山荘事件」が起きたんです。たまたま事件発生の第一報を電話で受けたのが僕でした。時間がたつごとに、事件がどんどん大きくなっていき、本部の東京や大阪から現場の軽井沢と、ニュースを送り出す長野局へ多勢の応援がやってきました。ところが、応援者はこれまでの流れや経緯がわからないから、どうしても見学者になってしまおう。僕は説明している暇もないから、結局体力ぎりぎりのところまで自分がんばってしまおう。

そうしたら、東京から指揮をとりに来た部長が「おまえが仕事できるのはよくわかる。だけど、ぶっ倒れる前に人に仕事を与えなさい。しばらくは、フィルムをつなぐのはやめて、人をつなぎなさい」と言ったんです。これは僕を変えろの一言であって、「人つなぎ」の第一段階でした。

その後東京に来てから、世界で一番長いニュース番組をつくれと言われて、「NHKニュースワイド」(今の、おはよう日本)をプロジェクトの一員として立ち上げました。長い番組ですから部分部分を制作担当するディレクターたちに、番組全体の流れを指示する役割が必要で、この時NHKでは初めて「総合演出」という立場が生まれました。つまり、「人をつなぎ、番組をつないでいく」仕事です。

僕は、フィルムの編集もやった時期がありますから、モニタージュ効果ということがいつも

頭にあります。人をつなぐ以上は、一足す一が三にも四にもなるようなモニタージュ効果を出したいと思っています。つながった人たちがお互いに響き合い、二人の知恵以上の何かが生まれる。それが理想です。ですから、「もともとプロデューサーというのは、人をつないで何かを生産する」役割であり、そのための「仕掛け」を考える仕事だと思っています。

ふつうの生活の中でも発揮したいプロデューサー感覚というのは、どう磨いていけるものなんでしょうか。

おもしろがることしかないと思うんです。たとえば「自分を自分ではつくれない。自分をつくるのは他人である」ということがありますね。特にサラリーマンなんかは、自分がなりたいたい職種や立場にはなかなかつけませんよね。今の仕事を続けたくても転勤させられたり、持ち場が変わったりする。他人によって新しい自分のポジションが与えられるわけで、そのポジションから新しい自分が生まれる。だから新しい自分の「場」ではとりあえずおもしろいと思うものを見つけないとダメだと思います。すると何か今まで見えなかったものが見えてきたり、新しいタイプの人との出会いも生まれてきます。実は、僕はずうっと東京に転勤することを拒否していたんです。なぜかという、スポーツが嫌いでスポーツニュースだけはやりたくなかった。でも東京の報道センターに行くと、当番制でやらされそうでしたからね。とはいっても辞令が出た以上は仕方ないですから東京へ来た。

やがて衛星放送が立ち上がった。衛星第一というのは、ニュースとスポーツが売り物なんです。そして、総合テレビと同じようなスポーツ番組では特徴が出せないから、いっそスポーツを嫌いなやつに作らせてみようということになって、僕がBSスポーツのデスクになってしまったんですよ。

そこでつくったのが「Be☆Sports 24」という毎日曜日・衛星二四時間番組です。当時はドウ・スポーツという言葉がはやっていました。でも、ドウ・スポーツやられちゃうと、テレビを見てくれない。だから、テレビを見ることでスポーツ気分になって欲しいという意味でBe Sportsにしたんです。BとSを大きく書いて遠くから見るとBSですよ。真ん中の☆でまさに星の放送。そういうタイトルにしたんです。

それで、二四時間スポーツの番組をやったくちやいけないわけだから、スポーツに関するものなら音楽でも絵画でも何でもとり入れました。ですから初日のスタートは北村英治オールスターズによるサインングジャズでスポーツをテーマにしたジャズのナンバー、例えば「ボダイ・アンド・ソウル」などスポーツの映画音楽ばかりナマで三〇分やってみました。

そんな具合に、たまたまやれと言われた領域には、すでに古参の専門家がいますから、同じことをやったんじゃない勝ち目が無い。そこで、おもしろがりながら、ちょっとひねり技でいく。すると、外から興味を持たれて、自然と人が集ま

ってくるんです。

地域プロデューサーづくり

いろんな地方に呼ばれて、地域づくりのプロデューサーもなってますね。

俳優の米倉斉加年さんが塾長をしている九州の古賀市の市民カレッジに呼ばれたり、石川県の小松市活性化委員とか兵庫県豊岡市のTADJIMA未来大学や長野県大町市の地域デザイン懇話会の講師をボランティアで仰せつかったりしているんです。

北海道の新冠町の場合は、ふるさと創生資金などを活用してつくったレコード館というハードに、何かソフトとしての展開をしたいという相談を受けて、去年のオープニングのとき音楽劇をやったんです。城之内ミサさんの作曲と音楽監督で町の人たちが一生懸命やってくれました。今年もいろんな企画を実施しています。このレコード館に現地プロデューサーというべき係長がいるんです。現地にプロデューサーの立場の人がいてくれるからこそ僕の仕事も成り立ちます。斜里町の劇場づくり講座でも、「ホールをつくるにあたって、有名人を呼んでくるだけの貸し舞台はやめましょう、自分たちが壇上に上がり、あるいは裏から支えてこそ自分たちの舞台です」という話をしたんですが、僕は今、地方に必要なのは地域プロデューサーだと思います。そういう人たちを育てる仕事は楽しいですね。

新冠がきっかけで、去年は日高地区PTA連

合会の母親研修会に呼ばれて、「お母さんたちこそプロデューサーである」という話をしたんです。プロデューサーというのは、ある意味で環境づくりですから、お母さんは子どもの生きる場、本来のつなぎ目を見つけてあげる。そういう環境をつくるだけではないんじゃないのか。お母さんは、ああしろ、こうしろと子どもを自分の作品として作りあげる、いわばディレクター的存在ではなく、もう一段上から出来あがりを見つめることのできる「プロデューサー」であって欲しいということですよ。

プロデューサーになってみよう

そうすると、地域の首長さんたちにもプロデューサー的感覚が必要ですね。

こうあったらいいなというアイデアを企画して実現するには、首長がプロデューサーであつたほうがいいときもあるし、あるいは参謀格の助役とかセカンド、サードあたりの人がプロデューサー感覚を持って、ディレクターたるべき人を何人か使っていく。要は、プランナーからディレクター、デザイナーなどいっぱいいる集団をつくりまとめていくキーマン、それがプロデューサーです。

一村一品運動がありました。いまは「一人一案運動」の時代。一人一人が何か一つアイデアを持ち寄るとすばらしいものが創出される可能性があります。「雑談は創造の森」と言うんですが、アイデアを会議なんていう公式の場ではなく、とりあえず集まってわいわい話すことが

大事です。雑談という気楽な環境から「おもしろがり屋のプロデューサー」が生まれてくるんですよ。

一方で、旗振り役は突出するとたたかれたり、足を引つ張られたり、たいへんな苦労があるみたいですね。

一人だけが飛び抜けていると、その人自身が天狗になってしまったり「あいつだけがなぜ目立つ」なんてことになってしまふ。だから、プロデューサーをつくるというよりも、プロデューサー群をつくるということでしょうね。

たとえば、むかし、祭りがきちんと成り立っていたのは、世話人会みたいなのがあつて、その中に一人頑固なおじいちゃんがいったりして「しょうがねえな」なんて言いながら取り決めていく。またそのおじいちゃんを守り、伝統を引きつぐ集団がいたりしてね。ですから、長年続いてきているお祭りは、すごいプロデューサー群がいるからだと思えますよ。新しい祭りをつくるのが難しいのは、土地に根づいたプロデューサーがいらないからではないでしょうか。

ですから、まちは数人単位でプロデューサーを持つべきだし、さらにまちを越えてプロデューサーのネットワークを持つと、ちよつと考えられないことまで出来てしまふ。新冠のプロデューサー的人物には日高地方で同じような活動をしている仲間を集めて、まず「日高プロデューサー協議会」をつくりなさいよとすすめてい

るんです。このように、人をつなぐプロデューサーとい

う仕事は、映画とか放送、音楽の世界にあるだけではなくて、ふつうの生活のなか、まちのなかにもあつていいと思います。プロデューサーには資格試験がありません。自分がプロデューサーであると自覚しさえすれば、その時からプロデューサーになることができますから。

さて、次の方をご紹介ください。

きょうの話にも出てきた中島宝城さんをご推薦しましょう。

中島さんは、この春退官されて今は帝国ホテルの顧問をされていますが、宮内庁で宮中の儀式を司る式部副長をされていた方です。昭和天皇の大喪の礼も指揮されました。また、宮内庁歌会始委員会参与で歌人としても活躍されていますしやいます。短歌の持つ「調べ」の魅力を、国内外の人々にまで伝えようとされています。そういう方ですから、どんなにかめしいかと思ってしまう。ところが、お人柄がとてもやわらかく、気品というものが漂っています。

その立ち姿がまたすばらしい。今の天皇が東宮様のときに侍従を言いつかつた時、先輩の侍従に言われたのは、「これからお側に立つことが非常に多くなるけれど、一番楽な姿勢は、頭の上からすうつと釣られた形で自然に立つこと」その姿勢が、とっても楽なんだそうです。

千年以上、乱れることなく連綿と伝えられてきた宮中行事は日本文化の粹だと思えます。式部官だった中島さんは、日本人の繊細さを再確認させてくれる方です。

(構成・緒方英樹)

編著者に聞く



谷口博昭氏

「湧志会」幹事長・
前 国土庁計画・調整局調整課長

地域連携が まち・くにを変える

— 21世紀をひらく地域からの挑戦 —

田中栄治・谷口博昭
小学館／1、995円 編著

— まず、「地域連携がまち・くにを変える」という本を出版された、きっかけをお聞かせ下さい。

谷口 国土庁に、私が来たのは三年前ですが、五番目の全国総合開発計画（全総）「21世紀の国土のグランドデザイン」の検討が真っ盛りの時でした。新しい地域づくり、国づくりのコンセプトが求められていた。その大きな柱として、地域連携が打ち出されたわけです。

それまでやってきた建設省での私の仕事の経験からすると、やはり現地でいいものができるというのが重要だった。国土庁は建設省と違って、他省庁と調整しながら総合的な地域づくりを進めるのが仕事で、直接の現場がない。現場をよく見て、国づくりに反映できれば、ということが直接のきっかけになりました。

地域づくりの現場にでかけると、各地で非常におもしろい人たちが、いい取り組みをされている。その輪が広がっているという感じだ。

その輪を、国レベルで総合的にバックアップすることも必要だと考え、具体的な地域連携手法として各省庁が関係を持ちうる「連携センター」構想を検討しようと、二年前、各省庁の課長クラス三〇人ぐらいで個人的な横のつながりの会をつくった。「有志会」ではありふれている、「勇志会」では勇ましくないので、さんずいを入れ「湧志会」を発足させました。意見交換、情報交換で、具体的な支援までもっていければと

考えたわけです。

——特色は、どこにありますか。

谷口 この本は、第一部が「今、なぜ、地域連携が」、第二部が「地域連携軸形成に向けた挑戦と実験」、第三部が「地域連携推進のための提案」にわかれています。

特に現地で実際に活動する場合の実例に重きを置いたのが特色です。それと、地域づくりは人のネットワークという面があるので、地域を少しでもよくしようと活躍されている人たちの名前が、事例のなかには入っています。

もう一つは、「湧志会」は国の役人ですから、民間の方々とパートナーシップによって本が



できています。具体的には、田中栄治さんが代表をされている「地域交流センター」で、地域連携のコーディネーターの役割をしています。そこにはいろんな方々が入っておられます。

——地域連携が重要だ、という理由をいくつかあげていただけますか。

谷口 全総的にいえば、国主導型から地域主導型に一八〇度転換しましょうという発想です。もっと分かりやすくいえば、地方と東京と対した場合に、やはり東京一極集中があったんです。それではうまくいかない。地域の特色や獨創性、地域の歴史や文化が生きてこない。その結果、自然環境も衰退していく。それを変えましょうというのが、今回の全総の発想です。

地域連携で、現に動いている事例があつて、かなり行けるなという感触もある。東京なり大都市に対抗するためには、小さな都市が一つ一つ独立でよいことをやっただけ大きな魅力にならない。地域連携で、できるだけ大きな固まりになれば、東京や大都市に対抗できるし、東京や大阪、福岡などを経由しないで、その地域が独立して、東アジアとか世界に、国際的にも交流・連携ができるのではないか、という発想です。

今まで右肩上がりの経済成長の時には、それぞれが努力してもうまくいったけれども、これ

からは人口も減るし、経済活力も下がる。そこを、交流人口によって、うまく活性化させて、日本全体をボトムアップさせていこうという感じ。地方があつて東京がある」という発想の転換が重要に多分なる。

しかし、それで終わるのではなく、「東京があつて地方がある。セットである」、お互いが同じ船に乗っているというか、運命共同体なのだという連帯意識が肝要です。

国土管理的にいえば、人口が来世紀の二一〇〇年で半分になる。東京圏は三千万人、大阪圏は二千万人、名古屋圏が一千万人。その時には、極端にはその三つの都市圏だけに人が住むということも可能だけれども、そんなばかげた住み方をするわけじゃない。海を隔てて東西南北三〇〇〇平方キロの広がりの中で、国土の資源・自然環境、その地域の歴史・文化とうまく共生しながら住む、私の言い方では「広い利用の仕方」が望ましい。

全総のサブタイトルにもあるけれども、地域が自立できるようなことが望まれるのじゃないか。その一つのコンセプト、地域づくりの発想が地域連携なのです。

——実際のおもしろい動き、取り組みを、二事例、ご紹介願えますか。

谷口 ハードができてきている地域と、ハードがこ

れからという地域では、少し取り組みが違うと思うんです。

ハードができたという意味では、平成九年三月に、日本海から瀬戸内海をへて太平洋までの米子―高知ルートが高速道路でつながった。

その時、単にハードができたというだけではなく、いろいろな取り組みがなされています。そのうち民間の活動の例をみますと、鳥取、岡山、愛媛、高知の書店、製造業、情報関係、観光関係者などによる「中国四国交流連携倶楽部」が平成七年二月につくられました。お互いのことを知り合うことが地域連携では重要だと、地方出版社と書店が連携して各県の出版物を直接送品し合い、「地方出版物の展示・販売フェア」を開催しています。

倶楽部の主要メンバーに、棚に三〇万冊の書籍が並べられる、日本一大きな書店だという今井書店の永井伸和さんがいたことも実現にこぎつけることができた要因の一つ。鳥取にいながら高知のことが学べるというようなことが可能になり、輪が広がっています。

倶楽部で地域連携軸の愛称を募集したところ、全国から一三〇〇あまりの応募があり、「中四（なかよし）さんかいライン」に決定した。中国・四国で「中四（なかよし）」、日本海、瀬戸内海、太平洋の三つの海という意味と、山海の珍珠という意味で「さんかい」、それに高速道路でつながった「ライン」、和洋折衷の名称にな

りました。

「山陰・夢みなと博覧会」（境港市）の開催や倉敷チボリ公園の開園にあわせて、公団が割引ハイウェイチケット「中四さんかいチケット」を発行したところ、目標をおよそ五〇％上回る販売実績だったといえます。

今度、三年目に入り、高知のカツオをトラックいっぱい積んでルートを上り、途中イナターチエンジヤやサービスエリアに寄り、その地域で交流しながら日本海まで行く。境港で日本海のカニを積んで、また高知に戻ってくるというような動きもできています。

もう一つ、山陰中央新報、新日本海新聞、山陽新聞、四国新聞、高知新聞の相互訪問取材、フォーラムの実施、共同紙面編集など連携協力体制もできている。

できるだけ多くの人、若い人、女の人も参加できるように取り組み、参加型に持って行くには、いろいろなアプローチが必要ですね。

——今のお話は民間の方たち中心の地域連携ですが、**首長の交流・連携の例もありますね。**

谷口 首長が一番熱心なのは、中部西関東連携軸で、山梨の山本栄彦甲府市長が会長をされていますけれど、長野の佐久市から静岡の清水市に至るまでの地域で、中軸は富士川、千曲川の流れる地域にある四六市町村の首長が中心の

「西関東市町村協議会」という連携組織です。定例的な合宿交流によって連携意識も生まれています。昨年は一泊二日の洋上サミットも開き、熱心に意見交換が行われました。船に乗って泊まれば、忙しい市長も逃げられないので、お互いの気心も知れるのではないかと、ということです。湧志会のメンバーもこれに参加しました。

きのう、この中部西関東連携軸の会合を長野の川上村でやっていますが、国土庁の事務次官も参加しました。この本の提案にもある「連携センター」というか「まちの駅」を今年は具体的にやる場所を打ち合わせていると思うんです。

——**地域交流・連携によって、雰囲気は、ずいぶん変わったのでしょうか。**

谷口 参加することによって変わると思うし、逆に言うとうちが参加せざるをえない、連携しなければならぬようなことが現地で起こっているのではないかと、私は思うんです。

今まで、隣の町と競争していつて、自分の市、町、村のエリアだけをやっていればよかった。しかし、よく「同じような箱物がいっぱい各地にできた」という批判意見が代表例としていわれるけれども、「そういうことでは、いけない」と地域で首長も感じ、地域住民も「それじゃ、

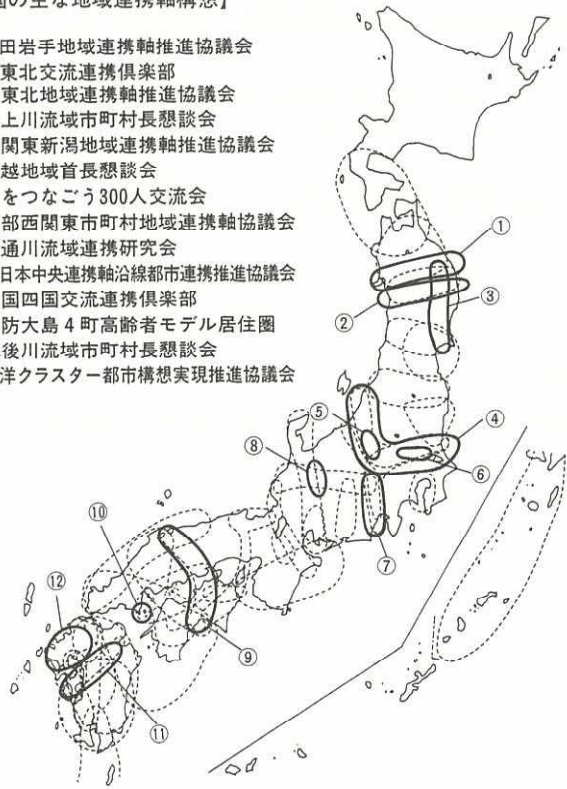
だめだ」と感じはじめています。

長野まで高速道路ができて、伊那地方の飯田市と駒ヶ根と伊那市では、それぞれ特徴のある病院、循環器系統とか、心臓外科とか、脳神経とか、そういう分担ができています。それも地域連携です。

同じものを各市町村でつくっても小さいものしかできないから、こっちは医療、ここは教育、自分のところは産業、あつちは観光と、メインの役割分担をしていく。その精神がパートナーシップで、上下でなくて対等関係。大小はあるけれども、特色を生かすことだと思えます。

【全国の主な地域連携軸構想】

- ① 秋田岩手地域連携軸推進協議会
- 北東北交流連携倶楽部
- ② 北東北地域連携軸推進協議会
- ③ 北上川流域市町村長懇談会
- ④ 北関東新潟地域連携軸推進協議会
- ⑤ 関越地域首長懇談会
- ⑥ 手をつなごう300人交流会
- ⑦ 中部西関東市町村地域連携軸協議会
- ⑧ 神通川流域連携研究会
- ⑨ 西日本中央連携軸沿線都市連携推進協議会
- 中国四国交流連携倶楽部
- ⑩ 周防大島4町高齢者モデル居住圏
- ⑪ 筑後川流域市町村長懇談会
- ⑫ 海洋クラスター都市構想実現推進協議会



——これから、地域連携で、まち・くには変わりますか。

谷口 富山県の利賀村に「瞑想の館」ってあるでしょう。最近、私の机の脇の壁に、瞑想の館にある曼陀羅図の複製を飾っています。利賀村はネパールと「そばの文化の交流」をやった。食文化だけでなく、本当の文化もやらなくてはいけないと「瞑想の館」をつくったら、すごく人気があるんですね。

長崎・佐賀の西九州地域で「海洋クラスター

都市構想」を提案し推進している小倉理一さんという人が、半年前から私のところに来て、「谷口さん、地域連携って、これだよこれ。曼陀羅だよ」という。その時、私はよく分からなかった。今年の夏あたりか、『まんだらのこころ』という文庫本がでて読んで、初めて気づいたんです。英語で「パートナーシップ」は、日本語でいうと「曼陀羅」なんです。

もっといえば、「衆生一切悉有仏性」というんですけれど、生きとし生けるものは、それぞれ持って生まれた光り輝くものがある。それを世の中に生かす、光らせることが曼陀羅の心だと。そういう発想で、地域連携が、それぞれのまちが、個人が役割を果たせば、私は日本全体がものすごく生き生きしてくるし、そういう力は日本国民にあるし、日本の地域にあると思うんですよ。

経済再生とかいってるけれども、要するに金融だけではダメで、他方でまじめに一生懸命やっている地方の住民や、国民一人一人を元気づける意味でも、こういった本を役所の人だけではなく、民間の人にも使ってもらえばありがたいということですよ。

タイトルは「地域連携がまち・くを変える」となっていますが、これで変わるかどうか分からないけれども、「変えたい」という気持ちで出版しました。

(平成十年十月二一日)

——構成・清 正樹

新たな時代につなげたい・首長の条件・いま町長に問われること

首長は後ろで 目立たぬように 指揮をとれ



亀地 宏

先頭を走っているのは後ろが見えない。ついてくる人たちの表情もわからなければ、気持ちもつかむことができない。気づいたときには自分だけが一人で走っていたことにもなりかねない。スポーツのレースだったからそれで勝てるが、人びとの心をとらえることが大事な地域社会づくりでは通用しにくい。私は首長はできるだけ後ろから、みんなを気づかい、はげましながら、それでいて自分の意図する方向に誘導をしてほしいと思う。

人は一丸にはなり得ない

首長になったばかりの人がよく住民に向かって「自分が先頭に立ってがんばるから、一丸と

なっついてきてほしい」と言う。もちろん、それは本人の意気込みを表すジェスチャーだろうが、本気だったら、とんでもないことだと私は思う。第一、不特定のたくさんの人たちが一丸となるはずがない。

人というのは十人いれば十人とも考え方も違えば価値観も違う。好き嫌いもあれば、あの人の方が右へ行けば自分は左という人も少なくない。数人、数十人という趣味やスポーツのグループならまとまることが可能だが、同じ市町村に住んでいるということ以外に共通点を持たない何千、何万人もの人たちが、一つにまとまることなど、まず、あり得ない。

もちろん、首長が「ついてこい」と号令をか

ければ、後を追う一団はあると思う。選挙を戦うくらいだから、個人的なファンや応援団はいるだろうし、とり入っておこぼれにあずかろうとする人たちもいると思う。むしろ、そういうとり巻きのいない首長の方が珍しい。

しかし、そのとり巻きを一丸となっついてくる住民と思ったら、とんでもない勘違い。その気になって手を振ったり、愛想をふりまく首長に対して多くの人は白けるばかり。でも、実際にはそういう首長が少なくない。

首長の音頭でアンケートに答えたり、提案をするグループをつくり、あいさつのために顔を出し、握手をして拍手をもらい、住民が呼びかけに呼応してくれたと言って得意になっている首長もいるが、そうして集めた人たちは全体からみるとわずかな数で、それもとり巻きの一部にすぎない。そういう形でつくったものは、首長が退任すると同時に霧散するにちがいない。

先頭に立つとできるとり巻き

ただ、多くの職員は本気でついてくると思う。首長もなにからなまでに自分でできるわけではないから、職員にも協力を求めるにちがいない。職員は当然、首長の方を向き、首長が示す通りに従おうとするだろう。首長が大きく旗を振り、個性を発揮すればするほど、職員はそれについていくことに懸命になると思う。そういう首長に逆らったり、意に沿わないことを口にした

はまずしない。

でも、そういうことが長く続くと、職員は自分で考え、工夫することをしなくなる。首長の顔色をいつもうかがい、こと細かに判断と指示を求める職員ばかりがふえることになりかねない。首長もいちいちそれに直接、答えるわけにはいかないうから、結局、こんどは幹部を中心としたとり巻きが誕生せざるを得ない。

そのうえ、そういう首長の場合には、職員たちがいくらがんばり、努力をしても、手柄はすべて首長のもの。脚光をあびるのは首長だけで、職員にライトはあたらない。首長もとり巻きも次の選挙のこともあるから、部下の職員が目立ったりするのは好まず、自分だけがスターでいたい。

首長一人がスターになり、とり巻きができる、情報が首長のところに伝わらない。はいってきた情報はとり巻きがチェック、選別し、首長の意に沿わないもの、機嫌をそこねるものだけカットをし、首長にとって都合のいいものだけを伝えるから、正確な情報を手に入れることができない。自分の知らないところで情報の管理と操作が行われていることにも気がつかない。そういう人も結構多い。

後ろにいると前が見える

職員が首長の方にはばかり顔を向けると、その分だけ住民の方は見なくなる。たとえ見ても、

住民に首長の意向を伝えて、理解させることにのみ力を入れ、住民が言っていることを首長に報告したりはしない。そうなると住民は首長からますます乖離をしかねないが、首長はそれにも気がつかない。

首長が旗を持って先頭を走ると、そういうことになりかねない。ふり向いたときに目にはいるのは、自分のあとを、ただひたすら、指示通りについてくる職員と、その職員が率いてくる一群の住民たち。ついてきていることはわかるが職員一人ひとりの気持ちと力量、後方にいるたくさんの方の住民の動向まではつかめない。しかし、それではいい市町村、地域社会はとてむきない。

ところが、首長が後ろに立つと、前にいるみんなの姿が見える。職員一人ひとりの資質や得手不得手もわかるので、それを見極め、それぞれに自分の意図と方針を伝え、サインを送ることがができる。首長が職員の後ろから、背中を見ながら仕事をすれば、とり巻きができることもないから、いろいろな情報もはいりやすい。

住民との関係も、できるだけ後方においてほしい。前方から自分で号令をするよりも、職員を通して働きかけて、意向を伝え、それに住民がどう反応するかを見てほしい。そうすれば、自分の方針が誤っている場合にはそのことがすぐにわかるし、修正、是正をするためのサインもまた出しやすい。

何のために首長になるのか

首長が後ろに立つということは、とりも直さず職員や住民を前に出すこと。当然、委ねたり、任せたりすることも出るので、ついていくのに比べると張り合いは全く違う。場合によっては自分で考え、工夫しなければならぬから、力量をみがくことにもなると思う。

そうなると、ときには首長より先に職員や住民が脚光をあびることもあるが、私はそれだいたいと思う。ライトがあたればはげみとなって、もっともっとしつかりしよう、がんばろうと思う。

選挙を戦い、首長になるのはいい市町村、地域社会をつくるため。それが最大の目標で、首長自身の知名度をあげることはではない。いい市町村、地域社会は職員がのびのびと活動し、住民が主体的に参画をしているところ。そういう社会は住民、職員、首長の絆も不思議なくらいに強く、不協和音は聞こえてこない。

人間一人の力は小さい。首長がいくらがんばっても、一人では地域を変えることはできない。変えようと思ったら、みんなが力を合わせることで、したがってみんなが力を出せるように、出した力を合わせることでできるようにするのが首長の役割。それには首長が目立ったり、スターになつてはダメだと思う。

母性を持ったリーダー待望



澤登信子・ソーシャル・マーケティング・プロデューサー

今、社会は大きく揺れながら、混乱している。しかし、いずれにしても新しい時代はこの中から生まれてくるのだろう。露呈してきた多様な課題の解決策を求めながら、私たちは、留まることのない時を重ねていかねばならない。いつの時代でも同じであろう。

私たちは一度として、同じ時は経験できない。この世に生まれた時から、ひとり旅が始まり、様々な有機的な繋がりの中から、手探りで選択を繰り返して、日々暮らしているのである。そんな個々の集まりが、社会となり、そして、様々な調整を経て、その時代、その社会に見合った新しいシステムが創出されていく。



五〇年ほど前、敗戦した我国は食べ物も、住む所も失った。その日暮らしを生き抜くために、しばらくは物質の豊かさを求めて、我々は必死に働いてきた。

この状況では、より効率的な生産体制が必要とされ、次から次へと新しい技術革新が生み出され、私たちの肉体的作業は随分と軽減されてきた。

この時代、個人の目標も、社会の目標も一致していて、みんなで一つの目標に向かうことができた。

このような社会でのリーダーには、パワーとアクセルを踏み続けられるようなエネルギーに溢れた人が相応しかった。

事実、次々に目標を突破し、更なる高い目標へ人々を導くことのできる腕力と行動力を兼ね備えたリーダーが、過去に数多く登場してきた。

必死で働いた時代を経て、社会が成熟してくると、違うタイプのリーダーが、当然のことながら求められる。

個人や家庭環境に少し注意すれば分かるように、社会が文明を高度に進行させると、パワーやエネルギーに溢れた人が少なくなってくる。

競争最優先の価値観より、安定、安全、安心をより願う人が増加するのは、社会の流れから考えてみても、必然的である。

この時代のリーダーには、量的な達成を目標にするのではなく、質的な豊かさを創造する知性が要求される。

パワーやエネルギーで人々を動かしてしまう人ではなく、人格と器の大きさで、多くの才能を持った人々を集め、組織することのできる器の大きさと、吸引力が人格に必要とされた。

アメとムチで人を働かせるリーダーではない。自分もチームの先頭に立ちながら、同じ苦労や楽しみを共有できる包容力を持っている人が、新しいリーダーの理想像であった。

このタイプのリーダーが成功している場合をみると、性格的に明るい人である場合が多い。明るく、楽しく、正直な人の周りには、自然に人々が集まって来ている。

さて、今である。この時代、社会が成熟期を既に過ぎてしまったことに、みんなが突然気がされたのである。

物質の豊かさにある程度満足して、スピードを伴った「量」と「質」の競争生活に疲れを感じた人々は「物」より「心」の豊かさを求めはじめている。

同時に経済力が弱まったために、人々は、笛を吹いても、号令を掛けても踊らなくなってしまうのである。

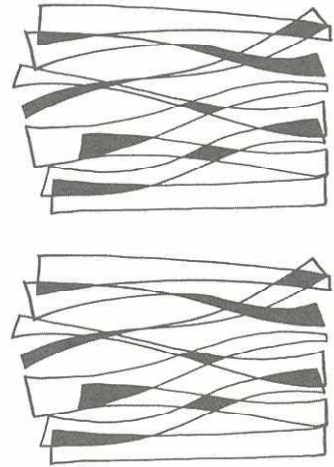
人々は、自分で自分たちの未来のことを考えようとはしている。

友人や趣味を通じて集まる仲間との語らい、新しい出会いを求めて、未知の地への旅、健康な暮らしへの知識、自然環境への不安、老後の準備など、どれも人々が持つ関心の対象は、精神的な無形のモノに移動している。

このような時代のリーダーには、個人化し、覚めてしまった人々を、もう一度、社会的な動向への関心に呼び覚ます力を備えていて欲しい。「物」や「ひとつの目標」を目指す時代には、私たちは、目標に向かうシンプルで、直線的な思考だけで足りていた。

心や無形のモノは、価値観と目標の多様性をもたらす。従って以前に必要だったリーダーの強引さと真面目さは、かえって嫌われる要因になる場合がある。

今という時代に人を束ねる難しさがここに



る。

社会が個人的な生活を中心とした都市社会が進んでいるのに、その発達が急激だったために、人々は、未だに他から構築された仕組みの中に捕らわれていて、自分で考え、自分の考えに従って行動する体験が殆ど出来なかった。

従って、まだ、個人で立案、行動を起こす自信が備わっていないし、社会も、それら個人をサポートするシステムが育っていない。

その結果、現代人には、行動力より、批判精神の方が勝ってしまい、現代は、組織も、個人も活力を失ってしまったのであろう。

現代のリーダーは、自分の考えを明確にすると同時に、人それぞれの考えを聞き、共に、目標を考える姿勢が必要である。その上で、関係者を含め、周りの人々が参加したくなるような魅力と楽しさ、清潔さが、そして、私が手を差し伸べなくては、危ないのでは、と思わせるあらゆる種の危なさも、その性格に必要とされる。

携帯電話の普及、パソコンの発達は、個人に大きな力を与え始めた。その優れた道具は個人が、直接、世界と通信、受信できる時代を創ってしまった。

社会の求心力は急速に弱まっている。まさに高度情報化社会の進行からも、人間関係の再構築は迫られている。

新しい時代のリーダーは、男性と女性、大人と子供、若者と高齢者、山村と都市、町と大都市、国と外国……、という単純な二元論思考に捕らわれてはいけない。

もうこの境界は無くなっている。女性、高齢者、障害者、外国人などへの差別が少しでもある人には、次の時代に対処できないでしょう。人は、男性も女性も、男性性と女性性を有していると思う。

二十世紀までは、社会は、力の発揮を優先した男性原理が中心となって、発達してきた。

二十一世紀は、平和、調和、安心の社会を創るために、女性原理を中心にその社会を創っていくと思う。

それには、女性自身が、自由で、差別をしない母性を活かして、新しい社会のリーダーとして、参加しなければと思っている。

◇ ◇ ◇
母性とは、循環と再生を基本にした曲線的思考のことである。

新たな時代につなげたい・首長の条件・いま町長に問われること

新たな時代の波をこえる

リーダーシップ、首長像について

田中尚輝・社団法人長寿社会文化協会(WAC) 常務理事

新しいリーダー登場への期待

長い人類史をふりかえっても、今はリーダーシップの必要性・重要性が指摘される特別な時期であろう。ことに、首長という責任ある地位の方のリーダーシップは、殊更に注目されることにならざるをえない。

このことは、当面している深刻な不況や金融危機、雇用不安の問題を解決するために必要だということではなく、現時点が歴史的な転換点あるいは文明的な曲がり角にあるからである。したがって、現在、求められているリーダー像は、当面する課題を解決するだけでなく、

少なくとも新しい二一世紀の一〇〇年問をどのようにしていくのかという眼と哲学をもった人物でなければならぬ。

ちょうど世紀末のいま、このような文明的転換点に私たちは立っているのである。

リーダーのタイプ

平和な時代では、これまでのシステムと慣行をそのまま引き継ぐ調和型・調整型のリーダーが求められるだろう。安定していた時代であった江戸時代において將軍や大名に織田信長のようなタイプのリーダーがいれば、リーダーとしては全く不適格であり、なんらかの方法で放逐

されていたことであろう。ところが、現在のように転換、それも歴史的な転換が求められている時代に当たっては、期待されるリーダー像は江戸時代とはことなるであろう。

当面する時代において必要とされているリーダー像は、先見性があり、どのような困難があるが現状を改革をすることから逃げない人である。現状のままであるということは、社会を悪くするだけであり、良くするためには「変化」をさせなければならない。

「変化」というのは、いいかえれば既存の秩序や利害構造を破壊するということである。

〔現在ある状況〕を別の〔新しい状況〕へ変革するということは、好むと好まざるにかかわらず、既存組織の利害構造を軋ませ、改編するということである。リーダーがこの改革に取り組めば、必然的にこれまでの状況の継続を望む人びとや団体・企業を怒らせたり、リーダーから離反させることになる。

このことを別の角度からみれば、リーダーが決断をして改革に取り組めば、そのことは拍手喝采で受け止められるのではなく、多くの場合は戸惑いと反発に囲まれ、リーダーを孤独に陥れるということである。

リーダーに必要とされる指導性の内実は、評論家のような言葉だけでなく、実践なのである。美辞麗句と「決意」だけを演説で繰り返し

ても、何も実践しない人はリーダーとしての役割を果たせない時代になってきているのである。

リスクを負うことの必然性

リーダーにはさまざまな条件が必要である。その中でも、最も重要な資質はリスクを負う覚悟があること、そして、人材を捜し出すことのできる能力を持つことの二つだと、私は思っている。

歴史的な転換点にある現在のリーダーにとって、まず第一に求められるのはリスクを負うことを辞さないということである。というよりリスクを回避して、リーダーは勤まらないということである。

リスクとは自分に被害を与えることであって、首長にとってのリスクとは二点に集約される。

①行政執行がスムーズにおこなえない。

②次期の選挙での支持をえられない。

逆にいえば、リスクを負って改革に挑戦するということは、日常業務の執行がギクシャクし、次期選挙で当選できるかどうか分からなくなるようなことなのである。

「いや、私の場合には、改革を実行しても幹部を含まぬ職員が協力してくれるし、次の選挙も大丈夫だ。ひよっとすれば無投票当選だ」などと思っている首長は、実際には改革の行動をおこしていない人か、あるいは自己慢心におちいつて

いるのではないだろうか。

改革とは痛みを抜きにしてはありえないのである。首長は、多くの人びとから選ばれたエリートであり、エリートは一般の人びとより多くのリスクを負わなければならない立場にいる。ことに現在のように変化させなければならぬ時には、リスクの質が高く、量が多いのである。

「七人の侍」に見る人材探し

つぎに、リーダーに求められる資質は、有能な人材を見つけ出すことであろう。いかに、首長が優秀であっても、そして十分にリスクを負う覚悟ができていても、自分一人だけで大きな改革をなし遂げることはできないだろう。企画力と実践力について高い能力があるメンバーが何人かいないれば改革は不可能であろう。

ところが、現実には首長の周辺にいる人材は能力はあるが、平和な時代のタイプであって、実に真面目に、かつ調和型でこつこつと仕事をすすめる人が多いのではなからうか。

しかし、現在のような混乱期にもとめられている人材は、突出型・行動力旺盛型が必要なのである。百数十年の歴史を持つ行政機構が抱える人材の多くは、調和型・調整型のタイプで占められており、改革にむくタイプの人間は、出世するラインからはじき出されているか、もしくはすでに退職していることが多いであろう。

幕末に活躍した坂本竜馬は脱藩者であったし、

大久保利道や西郷隆盛は藩主にそむくことの多い厄介者であった。首長は、自分に歯向かってくるような人物を含めて、人材を掘り出すことである。そうした人物は、庁内の隅に隠れているか、あるいは外に人材を求めなければならぬいかもしれない。

最近亡くなった黒沢明監督の作品の中に、有名な「七人の侍」がある。そこにおいて、野盗と闘うリーダーを引き受けた志村喬が扮する浪人が、自分以外に五人（その後、若者・三船敏郎が加わり計七人となる）を選ぶ場面が、私は鮮烈に記憶に残っている。志村は、これぞと思う人物に声をかけ、旅籠の中に招き入れるのであるが、入口の内側から木刀で打ち掛け、それによって能力を見極めたのである。乱暴なやり方だが、短期的に人物を見つけ出すには有効な方法だろう。

このように、首長には人材を見る眼、それを登用する能力が、いま求められているのではないか。このためには、首長が心の底から発する「改革の基本イメージ」がなければならない。それを強烈に発進し、そのイメージに込められる人材を庁内と庁外にこだわらず広く求めることである。

有能な人材の掘り起こしこそが、首長の掲げる百年の計と当面する課題の解決を図れる絶対的条件なのである。

まちの個性をどう生かすか、 どうつくられるか



市長と初めて会う

もう三〇年近くも前の話だ。高校を卒業してすぐ技術職員として横浜市役所に就職した青年がいた。採用式の日、市長に初めて会った。もちろん採用式でのあいさつは聞いたのだが、二人きりの出会いは洗面所の中である。青年が手を洗っているとき、壇上で見たおじさんが杖をつきながら入ってきた。市長とわかるまで少し時間がかった。思わず「こんにちわ」と大声であいさつした。市長は気さくに「ご苦労さん」と大声で答えてくれた。その情景、飛鳥田市長の声は三〇年たった今でもその青年（もう

立花恒平・赤煉瓦ネットワーク事務局長

十分中年になっているが）は思い出せる。

横浜まちづくり研究会に出会う

青年は三年ほどで大学に入るため市役所を退職したが、今度は大学卒で青年にとっての二度目の横浜市役所の採用式に出席する。市長は変わっていたが、その青年は、最初の採用式の市長と会った経験から相手がどんな役職者であろうが一度会ったことのある人には大きな声で相手の人の目を見てあいさつをはじめた。

青年は、市役所の職員を中心とした「横浜まちづくり研究会」から当時の仕事であった「横浜市緑のマスタープラン」についての話を頼ま

れ、気軽な気持ちで土曜日の午後、三〇人の研究会のメンバーと研究会顧問であった法政大学法学部教授（当時・元横浜市技監・企画調整局長、現地域政策プランナー）田村明さんの前で話をする。話を終えて席に戻りかける青年に田村さんはストップをかける。「プランは分かったがこのプランを君はどう進めて行くつもりなのか話してくれないかな」と言われた。

ちびまる子ちゃんの「ザーツ」状態（あの顔に線が入る状況）がおとずれる。なんとか話を始めたが「あらゆる機会を捕らえて努力して行く」というしまらない話になってしまった。プランを作るのは良いがその実践のための戦略を十分考えていなかった恥ずかしい気持ちで二次会に出席した青年に、田村さんや出席者はやさしいねぎらいの言葉をかけてくれるとともに、楽しい、あくなきまちづくり議論を続けて行くのだった。青年立花恒平が研究会のメンバーとなって活動しはじめたのはいうまでもない。

市長の声―赤煉瓦をまちづくりの核に―

横浜まちづくり研究会と舞鶴まちづくり推進調査研究会の交流から舞鶴での全国五例目のホフマン式輪窓の発見などがあり、一九九〇年十一月二十五日、快晴。舞鶴市は沸き立っていた。

「第一回赤煉瓦シンポジウムIN舞鶴」の開催。東京大学助教授（現教授）西村幸夫さんの基調

講演に続き、京都工芸繊維大学助教授（現教授）の日向進さん、煉瓦博士の水野信太郎（現金沢学院大学助教授）さん、アート空間プロデューサーの上田祐子さんなどが参加し、会場の参加者と一体になったパネルディスカッションが行われ、「赤煉瓦は市民共有の財産だ。市民・自治体

がそのことに気づき、保存・活用のための活動を積極的に展開することが必要」などの点で意見が一致し、大いに盛り上がった。あいさつに立った町井舞鶴市長（当時）は、「私は赤煉瓦の建物は古くて必要のないもので壊して新しいものをつくるのが舞鶴の発展につながると思っていました。しかしこれからは赤煉瓦をまちづくりの核としていきたい」と力強く宣言された。こんな正直な市長の声に会場の人々は割れんばかりの大きな拍手で答えた。このシンポジウムを契機に、舞鶴では市民組織「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」が誕生し、赤煉瓦ジャズ祭など個性あるまちづくり活動が活発化、まちの菓子店の人たちも、まだ赤煉瓦の動きがその緒についてばかりのときに、赤煉瓦饅頭、赤煉瓦浪漫（ティーケーキ）などを作りだし、「赤煉瓦のまち」の盛り上げに大きな力となった。

その後の舞鶴市役所の市長をはじめとする一丸となった取り組みは見事であった。舞鶴市は、赤煉瓦のまちづくりの第一ステージとして、明治三六年に旧海軍の魚雷庫として建てられた鉄骨煉瓦造二階建（フランス積）の赤煉瓦倉庫を

国から払下げを受け転活用し、市制五〇周年の目玉事業として、一九九三年一月六日「赤れんが博物館」をオープンさせた。もう一棟の赤煉瓦倉庫を一九九四年秋「舞鶴市政記念館」として開館した。

赤煉瓦ネットワークの―首長の条件―

舞鶴のシンポジウムや赤煉瓦ジャズ祭、赤煉瓦基礎講座（横浜）などの動きに支えられて、かつての青年が夢見た「赤煉瓦を核に地域の歴史と文化を生かし個性あるまちづくりをすすめる」赤煉瓦ネットワークが誕生した。一九九一年一月二日、横浜の技能文化会館で、「赤煉瓦ネットワーク設立総会・火入れ式」が一〇〇人の参加で行われた。横浜、舞鶴、江別、喜多方、呉など全国の七団体約一〇〇〇人が入会した。赤煉瓦をつくっている人、売っている人、研究している人、個性あるまちづくりで活用したい人、興味のある人など、とにかく全員が「赤煉瓦大好き」な人たちの大集合となった。

現在、赤煉瓦ネットワークは北は北海道・稚内から南は九州・日南まで、三七団体一三〇〇人の会員となっている。横浜を皮切りに舞鶴、江別、呉、愛知県碧南、喜多方などで開催してきた大会は、今年は一〇月三十一日大阪の日本聖公会川口基督教会礼拝堂で行う。五〇もの赤煉瓦のあるまちと個性あるまちを訪ね歩いて首長

に会って話をする機会も少なからずあった。その経験から、赤煉瓦ネットワーク事務局長から見た最良の首長の条件とは

- ① 信念をもってまちの個性を生かす人作れる人
 - ② 古いものを破壊すべき陳腐なものとするのではなく歴史的資産ととらえられる人
- ということになるのか。

まちを訪ねていくと、謙そんもあるのだろうがよく聞くのは「こんな遠くのまちによく来た。しかし、うちのまちには何にもない」という言葉だ。なんと自分のまちの個性や魅力に気がつかうとしない人の多いことか。そんな人達に語りかけることは、まず、「よそのまちを見てみよう。そして自分のまちと比べてみよう。さらに自分のまちの『ふ』『た』探しをやってみよう。」「ふ」は、古いもの（明治あたりからの手の届く歴史）、「た」は、たくさんあるものだ。必ずまちの個性が浮かびあがってくるはずだ。

しかし、必ず何かを探し当てなければならぬということではない。岡本おさみ作詞、吉田拓郎作曲、森進一が歌った「襟裳岬」は、「北のまちではもう 悲しみを暖炉で もやしはじめてるらしい」と始まるが、最終フレーズは「えりもの春はなにもない春です」と歌い上げる。この詞は襟裳岬は都会と比べて「余計なものがないことが良い」と訴えている。こういう個性にも気づく首長はどこかにいるはずだ。時代はこんな首長の出現を待っている。

新たな時代につなげたい・首長の条件・いま町村長に問われること

新時代の首長に求められる戦略性



福田優二・(株)電通総研チーフプロデューサー

はじめに

いま、世界経済は大戦後最大の危機に瀕し、日本社会を取り巻く環境もかつてないほど厳しいものとなっている。日本が右肩上がりの成長を続けていた時代には、行政は国民の様々な声に、余裕をもって応えることができた。また、美しい建前の世界にコストを投ずることも許された。

しかし、現在の環境はそれを許さない。膨大な財政赤字、経済停滞に伴う税収の低迷、深刻化する過疎、少子高齢化の進展など困難は尽きないが、今後も画期的な改善の見込みが立たない現在、財政のカンフル注射を打ち続けることは許されないのである。

では、自治体の首長はどのような道を選ぶべきなのか。答えは簡単ではないが、環境変化が

もたらした社会のニーズの変化に応ずるものでなければならぬことは確かである。その結果、おそらく、これからの首長はいろいろな意味での戦略性が強く求められることになるのではなかろうか。

メガ・コンペティションの中の戦略的対立軸

さて、冷戦終結後の世界経済を一言で言えば、「市場一体化の中のメガ・コンペティション(大競争)」ということになる。したがって、経済活動はますます効率性を求められるようになるだろう。日本における「金融ビッグバン」の遂行はまさにその象徴とも言える。

世界の金融の中心と言えば、ニューヨーク(ウォール街)とロンドン(シティ)ということになる。東京がアジアの金融センターとして三極の一つとして生き残れるか否かが、一つのテー

マとなっていることは周知の通りである。

では、ビッグバンを成功させて東京が生き残ったとして、いや、生き残ることを目指すとして、東京と地方との関係はこれまでとどうなるのだろうか。ニューヨークもロンドンも特殊な都市である。アメリカの各地とニューヨーク、イギリスの田園地域とロンドン、いずれも、根本的に異質である。しかし、これまで、日本の各地は「リトル・東京」を結果的に目指してきた。果して、このままでよいのだろうか。

「リトル東京」は「東京」との対立軸を持たないことを暴露した形容である。国民が東京的なものを求めるのが事実だとしても、「リトル」な分だけ「東京」の効率や吸引力に劣る「リトル東京」はジリ貧を免れない。

したがって、これからの首長は、メガ・コンペティションの中で、東京に対する戦略的対立軸を立てることが第一に求められるのではないか。

「クロサワ」のテーマパークとなる伊万里

ただの寒村に過ぎなかったアスペンが地域特性を生かした国際的なコンベンション都市に生まれ変わったことは余りにも有名だが、この事例は、適切なポジショニングによって、町は見違えるように生まれ変われることを示すものだ。

九月六日に亡くなった日本映画の巨匠、黒沢明監督の記念館が、「乱」のロケ地で同氏も気に

入った土地である佐賀県の伊万里市に建設されるという。国際的な人気を持つ同氏の全作品をコンピュータで検索して鑑賞できるようにしたり、さまざまな角度から「クロサワ」の世界を楽しめるようにする計画だそうである。また、記念館を中心に半島全域に及ぶ一大テーマパークを建設しようという構想もあるようだ。

この計画の子細について現時点で筆者には詳らかでないが、「メガ・コンペティション」の中の都市の魅力開発という意味では、「クロサワ」ブランドには魅力がある。大衆性とカリスマ性、そして国際性、ジョージ・ルーカスやステイブ・スピルバーグといった、現代の巨匠への影響力など、日本にとっては極めて希少な資源ということが出来る。伊万里市はもちろん、磁器でも世界的な評価が確立されており、これを機に伝統と同時代性の両面を備えた日本文化のショーケースとなることができるかもしれない。

戦略的対立軸の設定にリーダーシップを

東京に対する戦略的対立軸という話にもどると、「一村一品」などの運動もその試みの一つだったはずだ。ただ、「一村一品」は、産業社会の生産システムの枠の中の対立軸であったように思う。

産業は二十一世紀においても重要性を失うことはない。しかし、これからの時代は、産業に

人間が従属する時代ではない。むしろ、地域の個性的な暮らしのあり方が生み出す「結果としての産業」こそが求められるのではなからうか。では、いったい、人々のくらしのあり方の対立軸をどこに求めるべきなのだろうか。

チャンスは東京が居心地のよい都市ではなくなることかもしれない。東京が真に世界標準の経済競争が展開される都市として生まれ変わった時、日本の他の都市や町村のあり方にも大きな変化の時が来る。東京の空気が国際金融や高度情報に特化するにしたがって、都市としてのストレスはさらに高まるだろう。もはや、全国の都市が全体として「リトル東京」を追求することは現実的でなくなるに違いない。

つまり、高ストレス都市・東京は万人が生き残れる場所でもなくなり、人々は、もっと居心地のよい、人間的な場を求めるに違いないと考えられるのである。

もちろん、全ての人が原則的にメガ・コンペティションの中に生きていくのであって、何か世界に通用する強みを持つことが望ましいが、リトル東京ではない個性的な都市、個性的な地域こそが生きる道となる。そこで、対立軸の発見と設定に関して首長はリーダーシップが求められるよう。対立軸は、必ずしも、観光都市として発展の方向だけではないはずである。

日本酒やお茶にもチャンスが

日本人の品質管理能力は素晴らしい。これまでに、自動車やエレクトロニクス製品ばかりが注目されてきたが、私は、日本のお米や日本酒やお茶にも国際化のチャンスがあると考えている。もちろんコスト問題があるが、たとえば、日本酒や日本茶が世界中で好んで飲まれるようになれば、一挙にマーケットが広がる。日本の産地は世界に直結して自立するチャンスがある。ニューヨークには数百軒の寿司屋があり、回転寿司も世界に広がっているという。かつて、寿司が世界に普及することを誰が予想したであろう。要するに、日本酒はワインのように、日本茶は紅茶のようになりうるということである。日本の国力と文化的影響力は大きな可能性を持っているということである。

日本文化の中には、世界に通用する部分はまだある。それを発見することが必要である。そして、その展開、運営に関してリーダーシップを振るうことがこれからの首長には求められる。メガ・コンペティションの中では、国家予算を持つてくる政治力だけでは、都市経営は早晩行き詰まるのであろう。

二十一世紀の日本の理想的な姿は、世界都市としての活力を取り戻した東京と、リトル東京ではない形での自立に成功した多くの都市において、それぞれ、人々が生き生きと生活し、国土全体が均衡ある発展を遂げることである。

音の風景づくりに向けて



丸山 亮・作曲家

町づくり、郷土づくりに音の風景も考慮してほしいという意見を、だいぶ前からくり返している。この考えに共感を寄せる人たちの団体、日本サウンドスケープ協会は創立されて今年で五年目に入ったし、環境庁は一昨年「残したい日本の音風景百選」を定めた。自治体の中にも音に注意を払うところが増えてきて、この七月には金沢で「音風景保全全国大会」が開かれている。こうした関心が全国の市町村の首長にまで広がってほしいと思う。

スイスのレマン湖の南、アルプスの山峡に小さなヴァル・デリエという町がある。三千メートルを越えるダン・デュ・ミデイが目前にそびえ、谷を見下ろす斜面には牛が放牧されていて、その牛たちが鳴らすカウベルがあちこちから聞こえてくる。ここで平成七年の七月、「土地

の音楽」と題したイベントが行われた。町の中にいる広場にいくつかのスピーカーを置き、録音と生演奏を交えて、二つのアルプスにまつわる土地の音を居合わせた人たちで楽しもうという趣向である。

二つのアルプスのうち一つは、いうまでもなく地元スイス・アルプスで、もう一つは日本アルプスだ。私はこの日本アルプスにちなむ土地の音を集めてヴァル・デリエのイベントに参加してきた。そのときのことを少し思い出してみたい。

話はさらに二年前にさかのぼる。私の作品のコンサートを郷里の松本音楽文化ホールで開いた折り、友人であるスイス人の作曲家ピエール・マリエタンが会場まで足を運んでくれた。彼はこのとき信州の風景が自身の故郷のアルプスに

よく似ており、この山脈を日本アルプスと命名したのもなるほどと思ったようだ。それから間もなく、帰国した彼から手紙が届き、二つのアルプスにちなんだ音の風景を重ねて楽しむ音楽祭をしないかといってきた。マリエタンは普段パリに拠点を置いて各地の音を録音・再構成した作品をつくり、フランスのラジオ放送に番組を提供している。そんな経験から、土地には土地らしさを示す音の風景があると信じているのだ。彼の提案は、日本とスイスの二つのアルプスの住民の話し声を録音で集めよう。それにはどちらも音にまつわる質問をして、できるだけ自然な語りで答えてもらおう。さらに声以外の環境の音も加え、ヴァル・デリエに双方が材料を持ち寄って構成し、それを発表しようというのである。もちろん承諾の返事をした。

私はいま千葉県の流山市に住んでいるが、生まれ故郷の長野県南安曇郡三郷村には、盆暮れなど、何度か帰省し、家の近所には知人もいる。けれどもこの人たちの声、それも普段の会話を録音し、十分な材料を集めるのは容易でない。そこでこの作業は三郷村に住む父に頼むことにした。父は当時、母が隣村の特別養護老人ホームに入居していたので、そこへ介護のため通っていた。ホームは常念岳が見下ろすところであり、常念荘という。ここで父は、入居者や職員、近所のボランティアの人たちと毎日顔を合わせて世間話に興じる。父にはカセットの録音機を

渡し、マリエタンととり決めた質問をしてもらった。それでもできるだけ安曇野のくだけた調子が出るようにしてもらおう。

昔聞いた音で、何か思い出になるようなものがあつたら話してほしいという問いかけに、とうふやアイスクャンデーを売り歩く音、じやり道に行く荷車の音、田の草を取る田打車の音、山羊やにわ鳥の鳴き声、味噌玉をたたく音などがつぎつぎに口をついて出てくる。

父が集めた会話以外に、私も五月に行われる村祭のお囃しや、かけ声をかけて山車を引く音、用水路を流れる水の音、畑で啼く山羊、それに田んぼの蛙などを自ら録音してまわった。こうした材料を流山の自宅に持ち帰って編集し、二十分ほどの作品にまとめた。私にとって故郷の音のイメージを代表するものは川のせせらぎの音なので、これが鳴っているところに、昔聞いた音をなつかしがる人の声が随所に割って入り、さらに祭りの音や山羊の啼き色が色取っていく。これを土地にちなんで「安曇野音風景」と名付けた。スイスのイベントに向けて日本を発つ前に、NHKの国際放送にこのテープのコピーを渡しておいた。その一部はヴァル・デイリエのイベントの直前、ヨーロッパ向けの放送の中に取り込まれ、電波にも乗っている。

さて、ヴァル・デイリエではシャレと呼ばれる山小屋風の民家を改造した宿舎に私とマリエタン、さらにフランスやスイスから参加した十

人ほどが合宿して、「ヴァル・デイリエ音風景」をつくる作業に取りかかった。広場に面したカフェに集う人の話し声、チーズの職人や森林官などが音の思い出を土地のなまりで語る声、谷間の急流を下る水音、雷鳴など、ここでも土地らしさの出た音の素材が集められ、音風景にくり込まれる。私たちは議論を重ねながら、今度「安曇野音風景」と「ヴァル・デイリエ音風景」を組み合わせる時間表を作っていた。

いよいよイベント「土地の音楽」の当日を迎える。夕刻、といつても日の長い季節、まだ暮れきらない町の中央の広場を取り巻いているカフェや通路に、聞き手が陣取った。主催する町の広報のほか、新聞やラジオの案内で知った人、偶然通りかかった人など、様ざまだ。マリエタン自身が広場を見下ろす丘から長いアルペンホルンを吹き鳴らして始まりを告げる。続いて用意した録音や、楽器、さらに民謡などの生の音が土地に関連づけられ、流れていく。ヴァル・デイリエの雷の音は無理なく安曇野の祭囃しや人の声に移り、また自然にヴァル・デイリエの音と入れ替わる。スピーカーの音量は適度に抑えられ、時には耳をそば立てないと聞き取れないほどだ。イベントの最後、私は広場の傍に立つ鐘楼の鐘を鳴らした。五つある鐘の旋律はこの日のために私が作曲したのだが、不要な音を出さないよう、リハーサルなしの本番だった。夏の夕、たった一度のイベントはこうして立ち

合う人に土地と音の結びつきを強く印象づけ、また二つのアルプスの時空を結ぶ想像力を刺激して終わった。

翌年、私は郷里の人たちにも「安曇野音風景」を聞いてもらおうと思い、安曇野にある豊科近代美術館のホールを借りて、同名の作品コンサートを開いた。この土地を離れずに住み続けている幼な友だちが、耳に親しい地元の祭囃しを聞きつけて喜んでくれた。

このコンサートは直前に亡くなった母への追悼コンサートともなった。それで生前、母が詠んだ短歌集「ぬるせぎ」に作曲した合唱曲集をこの日のプログラムに加えた。ここにはぬるせぎという名の用水路が立てるせせらぎや、風景となっている音が多く詠み込まれている。

菜の花の黄を残して日は沈み裏の早苗田蛙なきそむ

畑すみのしその実裾にふるる時からからとなる秋のゆく音

地元の合唱団「たまゆら」の皆さんが、実景が浮かぶように心を込めて歌ってくれた。私たちが取りまく音は、貴重な財産でもある。その資源を活用するには、まず街路の放送や、防災無線の定時報など身のまわりの不用な騒音を出さないようにすることである。全国の首長に、そのことを強く望みたい。そして周囲の音に耳を傾けると、どんな人にも新鮮な音の風景が広がっていくだろう。

地域界を意識し、 総合的なまちづくりを



村上美奈子・計画工房主宰

東京をはじめとして、多くの都市で、中心市街地の空洞化が進んでいる。特に商店街の衰退は顕著である。車で利用する郊外の大規模店の出店によるストロー現象と考えられているが、そのことばかりが原因ではない。見えにくい部分での変化に、着目したい。問題は、いろいろな原因で、居住者が減少していることである。中心市街地にも、これまでは、利便性や下町的人間関係など、それなりに居住の魅力があった。土地経済による生活破綻により、今では、魅力うんぬんよりも、住んでいられない状況や零細な自営業のたちゆかない状況をつくってしまった。都市の周辺部が拡大し、中心部の求心性が弱まり、都市が分解しつつある。

地方の時代というものは違っている。地方の都市でも、中心部の空洞化現象は見られる。スケールは異なるが、分解現象も見られる。

メガロポリスは、国としての一体性が重要な政策の展開において、メリットが大きかったといえる。が、ひとりひとりの生活の質を見直す時代には、快適な調和の保持できる、適度な広がりとしての生活圏―地域が見直され、地域生活での可能性が問われるようになってきた。地域を構成する町や村といった地域の単位が、着目される時が来ている。

生活圏としての地域の境界

アメリカ合衆国のように広い大陸では、車社会であったが、その弊害がクローズアップされている。将来にわたって、自分達の廃棄物の処理、水の供給等の管理、エネルギーの有効利用などによるサステイナブルな都市（持続可能な都市）を考え、都市の無秩序な成長の抑制と生活圏としての地域及びその境界域の認識が非常に重要視されつつある。

日本は、島国で平地が少ないため、都市が連担し、境界域の認識は希薄である。しかし、生活圏としての暮らしの質を求めようとすると、地域独自のルールを定めるため、境界域の認識は、非常に重要になってくる。

江戸時代では、国がある程度の独立性を保っており、国と国とで政策の違いがあり、政策の維持と持続のために、国境は、重要であった。生活圏の境界を重視する歴史はあった。このことを思い起せば、地域性をいかした生活スタイル、オリジナル性のある、環境に配慮した省資源を前提とした生活スタイルを確立できることが、イメージできる。

しかし、生活のすべてを江戸時代にもどすというわけではない。境界域の設定方法。境界域と境界域との関係や連鎖のあり方などは、時代に適した形をとるべきである。

地球規模の情報を取りつつ、国家単位のリーダーシップと地域単位の具体的な施策展開。市民ひとりひとりが意識できるような市民の集合と

しての地域性をふまえた生活スタイル—このような連続性を前提とした政策ビジョンを持つことが、首長の条件として問われるであろう。

新たな時代へつなげるもの

「時代が変わりつつある」という予感はある。では、「どう変わるのか」という点では、議論は分かれる。これまでの時代の変化も予想を越えており、「予測できない将来」という体験を持っている。

従って、「新たな時代につなげたい」というその「新たな時代の変化」をどう捉えるか—変化の認識が、先に述べた政策ビジョンの裏付けである。

これまでは、経済振興を中心にすえた形で、日本国株式会社の体制で、物事は進んできた。都市づくりも経済振興を目的としており、フオーアアップとしての福祉や環境や文化のまちづくりであった。

中央政府が、リーダーシップをとり、その方針に追従する形であるため、日本中が、同じような駅前顔を持ち、南北に長く、気候の違う日本列島のどこへいっても同じ性能の似たようなプレハブ住宅が景観をつくって来た。

しかし、これからは、気候、風土、歴史など地域性を踏まえて、福祉、環境、文化、教育、経済が総合化されたまちづくりとすべきである。

地域性をふまえた施設の展開

地域性をふまえた、独自の施策—生活圏としての区域を限定した形の施策への変革は、高齢社会の到来と地球環境の維持という二つの課題も起因している。

高齢社会は、目前にせまった変化である。この課題をいかに捉えるか、高齢化率のアップとして福祉施策の充足へ対応する場合と、若い世代の減少・少子化の状況に対応する場合とは、施策は大きく異なる。

すでに、高齢者対応施策は、市区町村での独自展開が進められている。東京武蔵野市のリバースモゲージや江戸川区の住宅のバリアフリー化。地方の村おこしのための大規模高齢者施設の建設。在宅介護支援を中心とした支援体制の充実などさまざまな形をとっている。首長はアイデアを提案し、広く住民に同意を得る能力を問われる。

町、村など身近な生活圏での施策については、市民も解りやすく、ボランティア活動などで協力しつつ、効果的な施策展開も可能である。

地球環境の課題についても、広く地球規模の問題でありながら、対策としては、身近な生活改善が基本である。しかし、ひとりひとりの努力では解決しない問題であり、地域でまとまったとりくみが最も効果的である。廃棄物を少な

くし、緑化を行い、地下水を大事にする。省エネルギーのための家づくり、まちづくりを行うには地域の気候、風土に適したものを建てていく必要がある。南の暑い国では、屋根の庇を長く出し、断熱よりも通風を考える。地域の風向きをとらえ、まちの中に風が流れる街づくりを考える。

雪国では、屋根の庇は短くし、家の断熱性能を高くし、積雪の除去よりも、積雪したままでも生活できる家づくりを考える。高齢社会の人手不足対策にもなる。

資源エネルギーの不足や、地球の温暖化防止の将来を見すえたサステイナブルな家づくり、まちづくりは、地域別の解決策を探ることになる。首長はそうした技術を提案できるブレーンを持つていなければならない。



地域性をふまえた生活スタイルを前提とした家づくり、まちづくり、施策の展開は、市民とともに、長期にわたって、少しずつ実現していくことになる。急激な変化は危険である。

町、村長は、長期政権に耐える人物でなければならぬ。市民に尊敬される人格者であり、実行力のある人でなければならない。

その町、その村でオリジナリティのある生活スタイルを根づかせるには、小中高等学校の教育も大切となる。生活する土地を理解し、愛し、育てる市民を育成していかなければならない。

新たな時代につなげたい・首長の条件・いま町村長に問われること

二十一世紀の地域をデザインする 七つのファクター



構想不況を超えて

混沌の時代である。概ね、世紀末というのは混沌期である。十九世紀末は政治も産業も芸術も混乱の時代であったが、それらが少々乱暴に表現すれば二〇世紀の自由主義や資本主義やポストモダンの芸術を胚胎した。地上に落ちた果実は一度腐って、それを滋養にして内包していた種から新しい芽が生まれ出る。

いまや経済も社会システムも混沌を極めているのは、私には二十一世紀社会を発芽させるための一つの苛酷なプロセスのように思える。ましてや現在社会は世紀末だけではなく千年末である。規制緩和などという表層的なものではなく、これまでの多くの制度や仕組みが崩壊し、それらの残滓の上に次の「千年王国」が築かれ

望月照彦・多摩大学経営情報学部教授

るはずである。しかしその至福の千年王国を創り出す土壌はどこにあるのだろうか。

二十一世紀はさらに高度な情報の時代だとされている。しからば、その情報をコントロールするコンピュータが主役となるであろうか。無論、コンピュータも大切なツールであるが、やはり次の千年王国を創造するのは人間の「構想力」である。

現代社会の不況という現象は構造不況といわれている。社会構造的になるべくしてなった不況であるが、この不況の向かうところを「構想不況」にしてはならない。人々の至福の千年を約束するのはコンピュータではなく、人間の「構想力」なのである。

村長の構想

丁度一年程前に、東京デイズニールランドのある舞浜の海岸縁のホテルで開かれたまちづくりのシンポジウムで講演する機会があった。そのシンポのパネラーの一人にユニークな人物がいた。岡山県の東粟倉村の春名明村長さんだ。姫路から入ってもローカル線で二時間も分け入った人口一五〇〇人しかない寒村である、という叱られるか。しかしご多分にもれずこの村も過疎問題を抱えているが、春名村長の報告は「愛の村構想」という実に明るく楽しいものだった。ふるさと創生資金ではフランスのメーカーに注文して小高い丘に村中に鳴り響く「愛の鐘」を建立した。そのアイデアも、主に村役場の若手を中心になって生み出したものだ。子供が生まれるとこの鐘が谷間に鳴り響き、今ではこの鐘を鳴らすために結婚式をここで挙げたいというカップルが全国から引きも切らない。イタリアでは地域を愛する郷土主義を「カンパニリスモ」といっているが、それがコミュニケーションの原形になったものでカンパネルラ、すなわち鐘の聞こえる範囲をいっている。

もうすでに私はこの村を三回も訪れている。春名村長とそのスタッフが実に雄大な構想を持ち、また実践している現場に触れたいからだ。世界の木工玩具のセンターにしたいという三セクの現代玩具博物館やその西田館長が力を入れているオルゴール夢館がこんな少村としてはびつくりするような集客力を持っている。クワハ

ウスと地場産業センターを融合した「愛の村パーク」も今年の春にすでに完成しているが、私が感動するのはその現実ではない。春名村長と仲間、この過疎の小さな村を近い将来世界の小村研究のメッカにすることを夢みているのだ。

二十一世紀という社会は必ずスモールタウンが復権するという強い信念がこの構想の根底にある。そこで今から世界に貢献するGSTI（世界小村研究所）を村に設立しようとしているのだ。二〇〇一年には、世界の小村の首長が集まる「世界スモールタウンサミット」を開催することを目論んでいるのである。春名村長の頭には小さい、過疎、山間地というのはメリットではあっても、決してハンディではないというこれまた強い信念がある。私が感動するのはまさに小さな村の大きな構想力だ。

二十一世紀の首長の条件

元氣な首長は春名村長だけでなく日本全国に大勢存在する。この逆境をプラス発想にして地域をデザインしてしまおうという輩である。たまたまここでは春名明氏を挙げたが、私の仕事上これらの首長さんに出会って大いに感動するのである。いま、日本の実業界でもビル・ゲイツを超えるようなアントレプレナー（起業家）待望論が存在するが、町村長にも同じアントレプレナーシップが求められるだろう。その条件として、私はまず「構想力」を挙げたが、それ

は未来へのビジョンとミッション（志）がなかったらどんなにお金を投入しても地域づくりはできないからである。私のつたない経験から、この構想力を第一として全部で七つの首長の条件を設定してみたい。第二の条件とは「陽気な危機感」である。陽性の問題意識がなければ、構想力は生まれ得ない。そしてこの危機感こそが実は首長の情報感度を高める根源にあるものである。平松守彦大分県知事と話す機会にいつも感じるのはこの陽性と危機の意識による情報収集の名手であるということである。第三は「自立と自律の精神」である。これからは補助金目当ての地方自治は破綻するだろう。困っても国が何とかしてくれるだろうという精神は過去のものである。すなわち自前の経済とストイックな精神が求められる。それは規模が小さいということを有利な条件に変えてくれるはずである。第四は第三の条件を支えるという意味でも「マネージメント力」という能力が求められるであろう。地域自立のためにはますますマネージメントパワーを発揮して地域経営（タウンマネージメント）していくことが大切となる。その視点から「地域産業」の創造は、欠かすことのできない戦略となるであろう。また最近注目されているNPO（民間非営利組織）であろうとも、経営という視点を抜きにしては存続することはできない。地域経営にそのことも肝に命じておく必要がある。

第五は「イノベーションマインド」ということであるが、古いしきたりや制度に安住しないで常に変革していく力を持つということである。ビル・ゲイツのマイクロソフトであろうとも一瞬のイノベーションの欠如が会社を没落させるという原則があるが、地方自治体であっても同じことである。無論、このことは地域の古い文化や遺産を大切にするというマインドと相いれないものではない。第六は「パートナーシップ力」ということであるが、自治体にとって最も大切なパートナーは地域住民であり生活者である。首長がいくら構想力がありイノベーションを住民と共有化することができなければ、それは村民や市民の幸せには繋がらない。また首長は地域外のブレンとのネットワークを持つことも必ずや地域経営に役立つであろう。最後の第七の条件はやはり「体力」である。首長の体力は地域の体力でもある。サステナブル・コミュニティ（持続可能な地域社会）という考え方が生まれているが、地域の活力が持続するためには、その資源の一つが首長の体力である。以上に挙げた七つの条件は多すぎるかもしれないが、実のところ私が感心し地域の未来をサポートしている首長はほとんどがこれらの条件をしっかりと所有している。彼らがまた、私には地域の未来だけでなく、日本の未来のサポーターであると確信できるのである。

求められる首長像

黒澤丈夫 全国町村会会長・上野村村長



町村が提言し、
主張する時代へ

森 二〇世紀は、ある意味で都市あるいは中央の時代でした。二一世紀は、町村をはじめ地方が主体になるべき時代です。徳川時代に戻るわけじゃないけど、それぞれの地域が自立することが求められています。

全国の市町村を回っていると、頑張って伸びつつある地域と、氣力を失ってなかなかうまくいかずに衰退している地域と、二つに分かれているのが最近の傾向のように感じます。どこにそういう分かれ目があるのか。一つは、何とんでも自治体の姿勢、特にその首長さんの能力とか行動がきわめて大きく作用していると思います。

黒澤さんは、上野村村長として九期、全国の町村会の会長を務められている大ベテランですので、今日はぜひ町村長哲学みたいな話を伺いたいと思います。

では最初に、町村会というのは一体どういう組織なのかというあたりからお願いします。

黒澤 町村会の従来の動きをたどりますと、はじめの頃は町村長の親睦をはかったり、国の予算編成に対する陳情や要望をする団体であったと思います。それがだんだんと、いろいろな共同処理をする事業が増えてきています。例えば、

対 談

新たな時代につなげたい

明海大学教授・全国地域リーダー養成塾塾長

森 巖 夫

1998年9月16日に



町村道の管理の問題。今度の台風のような場合に、決壊して事故でも起こる。そうするとその補償問題が起こったとき、一町村だけではとてもまかないきれない。そういう不測の天災などに対して共同処理していくことが必要です。また、人の問題では、職員の保険事業ということも行っています。

ところが私は、これだけではだめだと言っているんです。もう少し進んで、地方分権とか地方自治の問題とかに対してもっと提言する、要望よりも強い発言をすることが、われわれ全国町村会に求められていることです。いまや国をあげての大改革の時代ですから。

森 お願いじゃなくて、主張しなきゃいけない。黒澤 これからは地方も積極的に発言していかないと、国を誤ります。

前の橋本内閣は、行財政改革ということもくろんでやろうとなさった。そのこと自身はいいことだと思う。そのことから地方分権問題も起こってきている。ただ地方分権も、国の側からいうと、これ以上重荷を背負うのは困る。国の荷を下ろしてその分を地方にやらせようという流れで来ている。本当の意味の地方と国で仕事の持ち用を変えようというのではないでしよう。

森 国が自ら持っている必要のないものは分けてもいい、要らない権限はあげるよという態度なんではないか。

黒澤 農地の問題なんかでも、いちいち農林大臣の判こをもらわなきゃ、転用だとかできない。そういうことは大いに地方に権限を移すべきだし、県と町村の間でも、イノシシとかカラスが多くなりすぎて困ったときとか、駆除するときにはいちいち知事に手続きをとって許可がいる。市町村長の段階で決めた方が現状に即している問題は山ほどあるんですよ。

森 現場のことを一番知っているのは、何といても首長さんなんですからね。

黒澤 そういうことを見ていて、現場を担う町村会がさまざまな問題に対して訴えていく時代に直面していると思うんです。

森 全国の町村会長がそういうことを堂々とおっしゃられるというのは、やはり地方の時代になりつつある証拠ですよ。

地方自治とは何か

黒澤 地方分権の中で、委員の皆さんがまとめたように「上下主従の関係は終わった。対等協力だ」と、これはいいんですよ。だけど、合併問題なんかを話しても、小さい町村に権限をやっても財政や能力の問題でこなせないとか、そんなことから決めることじゃないでしょう。小さな町ほど連帯意識を感じ、「自分たちでこのわが村を」という気持ちが一番持っているんです。

す。

森 そうですね。それが民主主義というものですよ。

黒澤 憲法に「自治」という章まであるんだから、もつと本当の自治ということを考えて、自主財源を地方に与えるという配慮を持って国政を運用すべきだと思います。われわれの自主財源だということになれば、市町村長が計画を出し、予算を組んだら、審議の過程で「町長、どういうわけだ」「村長、これ説明しろ」となるわけです。住民に対する投資の効果がどこにあるのか、何のためになるのかということが当然論議されます。

たとえば養豚場を農林水産省の補助金でやるときは、要綱に基づいて補助金が付与されるけれども、床は何センチ以上のコンクリートを敷けとか、柱は鉄骨で強固なものにしろとかいった具合になる。ところが、われわれの判断では、そんな一〇年先まで養豚業が続けていけるかどうかすらわからない。そんな中で、床はそんなに強固にする必要ないし、柱だって安い間伐材でやりやいいじゃないかと、そんなふうになるわけですよ。本来の自治体は、そういうことから自主的に考えて、むだを廃し、必要最小限の金でやれるようにするわけです。

森 足が地についた政治というのは、それぞれ自分の地域の事情や条件にあった施設なり制度なりをつくることです。比喩的に言えば、足に

合った靴を求めるべきなのに、中央政府が一方的に靴をつくって、それに足を合わせろというやり方で地方に押しつける。だから、むだが多かったり、靴に足が合わず痛くなったりする。

住民の自治意識

政府の経営感覚

黒澤 オーストラリアのパス郊外の町の振興政策を見学したことがあるんです。その町の地域開発事業は、パスに住む人たちははじめ、多くの人たちに疲れをいやしてもらおう安らぎの里にするという計画でした。ところが、この計画を立てたときに、議員さんから「これはいい計画だけれども、その財源は町にあるのか」という質問が出た。町では「財源は半分しかないけれども、あとは借金して十年くらいに分けて払うつもりだ」。すると議員から「そんな増税して、住民負担が増すようなことをわれわれは軽々しくやるわけにはいかない。だったら、いい計画だから半分だけやったらいい」と言われて、現在の状況があるということでした。

われわれが山村振興とかいろんな事業をやろうとすると、補助金をもらう。そうすると起債で面倒見ってもらうという仕組みになっているから、財源対策の問題については、われわれが議会にかけるときに、大体において住民の懐を考慮なくともすむ場合が多い。それはそれであり

がたいことですが、住民から自治意識をなくしてしまっているという反省があるんです。

森 中央が全部見てくれるというのは、一見温かいように見えても、結局は中央依存型体質にしてしまう。地域の自立にはマイナスな面もありますね。

黒澤 家庭で自動車を買うに当たって、どうやって払うか相談して合意がないと買いません。自治だってそれと同じところがあります。自分たちのまちのことを、自分たちで相談して、労働力を出しあうのか、お金を出しあうのか、何にせよ、まちの目標に向かって力を合わせて進むという自治の基本に帰らなければならぬ。

首長はそれに対して、国や村によりかかるのではなく、自立をうながすリーダーシップをとるべきでしょう。

森 そういう点から言うと、これまでの国の政治にも問題があるけれども、町村長さんたちにも反省すべき点がある。財源のことを考えずに、隣の町がこういうものを建てた、うちも建てなきゃいけないというふうに、モノづくりを力をつけてきた。さしあたり補助金がもらえればそれでいいと。建てたら後でどれだけ金がかかるかということあまり考えずにいた。国に頼りすぎて建てていた。というより、国の予算をよそより早く、よそより多く取ってくるのが、首長の手腕のように考えてきたきらいがありますね。



黒澤 すると後で人件費もかかる。
森 メンテナンスも大変でしょう。
黒澤 そういうことに対して、将来の経営まで考えた企業的センスを持った財政措置を全然やってこなかった。ですから、そういうことを振り返って、地方も中央もトータルな経営感覚を

持った政府であるべきです。
森 マネジメントというか、お金のやりくりもできる、投資効率も計算できる、職員も上手に使える、PRにも長けている、そういう企業性が要求されます。

これからの首長に求められるのは

黒澤 新しい時代がくれば、地方分権になるでしょう。そこで大切なことは、市町村長の選び方もその一つですね。選挙が人気投票でもよくない。能力だけでなく、きちんとした哲学をもった指導者、そして何よりも勉強しなくちゃいけない。高尚なことからトイレのことまで同時に考えるのが、首長なんですからね。

森 黒澤さんのお話を聞いて思うんですが、首長として地域に対する誇り、きちんとしたビジョンを持っておられる。そこから、自信とか愛郷心も出てきますね。

黒澤 私が村長になってしばらくしたときに、村人がよくないことをして村の名前が新聞に出たんです。その時つくづく思ったのは、「わが村は、地形や交通事情、情報通達等が県下で一番遅れている県下のチベットと言われることがある。これで住民の心が誇りを失った状態になっているのかもしれない。これを直さない限り、いくらいい村をつくるかといったって生きてこな

い」。それでどうやったらいいかと考えたんです。

その時、かつて中国に行ったときに町のあちこちに書いてあった言葉を思い出したんです。

その言葉とは立ち小便をさせない為の「君子自重」。日本だったら「立ち小便するな」ですよ。人の扱い方がなんてうまいんだろうと感心した。「あなたは君子です」とまで奉られたら、そんなことはできなくなりますよ。

そこで考えた。目標を「栄光ある上野村の建設」という言葉で揚げたんです。つまり「私が目標とするのは栄光ある上野村だ。それは皆さんが誇りを感じる上野村、定住することに自信をもてるような村、そういう村をつくりましょう」と説明したんです。そしてそれを具体的に四つの柱で支えました。健康水準の高い村にする、そして道徳水準、知識水準の高い村、さらに経済的に豊かな村にする。この四つの柱が栄

光ある上野村を支える。そういう方向から一つ一つこなして今に至っているわけです。

森 体と心と頭と経済。それぞれが関連して高まっていくんですね。

黒澤 自治の面からいって一番大切なのは道徳の問題です。人間というのは、単に烏合の衆ではありませんね。そこには一つの協力が生まれなければならないんだけれども、そのためにはお互いが自分だけを考えないで他人をも考え、ともに幸福になろうとする。そうすれば自然と不文律で道徳が生まれてくると思います。

役場の窓口にはいろんな村民が来て、自分たちの身近な道を直してほしいとかいろんな主張を訴えに来ます。それは、順序として先にやるべきことならやってもいいけど、主張としては住民全体、村全体を考えて優先順位を決めなければなりません。それでも、個人的な、あるいはグループでの要求は限りがないんです。



そんなとき、矢野一郎さん（第一生命四代目社長）の書かれた文章の中で「協力」という言葉に出会いました。「協力こそ人間の生き方の大きな原則の一つ。お互い見える範囲の協力ばかりじゃない。見えない人やモノの協力もある。ガリレオとか歴史的な先人の協力も、われわれの知識となつて教えられている。そういうありがたさを知った上で、みんな協力して地域社会をよくしていこう」ということです。

それを理解して、村民の皆さんが協力し合つてこそ楽しい生活もある。その冊子は、村長の推薦の言葉をつけて、村民全員に配りました。

森 今流に言うくと、生涯学習のはしりですね。

黒澤 日本航空の墜落事故があったとき、よその人が、「上野村の消防団はよくやった」と言う。何日も何日も活動を続けてくれました。

森 その「協力」の精神が浸透していた証でもありますね。あれには、全国民みんなが感心しました。

黒澤 そういう協力心と連帯感があるのが、真の社会であつて、人口が多いというだけで投票にも行かない、隣人のことにも気を配らないなどというのは烏合の衆に近いと思うんです。

森 社会というのは心のつながりできてきているんですからね。本来、人間的なつながりが地域の基礎単位でなければなりません。ともあれ首長さんとしては、勉強し続けなければならぬ。地域に対する誇りが必要だ。そして、地元の足

元をよく見て対処するということですね。

黒澤 この市町村にも、そこには独特の特性というものもあるし、地域づくりのやり方も千差万別だと思うんです。それを適材適所に拾い上げて、うまくくみ上げていけば立派な社会ができるし、心の豊かな地域づくりを広げていくべきだと思います。

森 言葉では心の豊かさが大事だとよく言われますが、まだまだモノづくりで成果をあげるこれが首長さんの能力みたいに使われていますからね。

新しい時代の予感

黒澤 最近、私がつくづく感じるのは、人の価値観が変わったということです。

一〇年くらい前から、若い世代がぼつりぼつりと上野村に住み着いて、子育てをやったりして暮らしています。そういう人たちに聞いてみると、「都会は確かに所得を得る場所はたくさんある。物質文明の恩恵で、何でもすぐ手に入れることもできる。だけど、そこは人間の住む天地ではない。自然がない。土がない。きれいな空気がない。そのまま飲める水がない。そういうところで、子どもは育てられない」と言う。

森林組合の労務班の仕事というのは、苗木を植え、下刈りをし、除間伐をするという労多く

して金にならない。ですから、私が村長になってから三三年間で、この上野村に生まれた若い衆は一人も入ってこなかったんです。ところが、三年くらい前から、都会から相次いで四人の人がばらばらに入ってきた。それで入ってくるときに私はこんこんと言った。「いまは丸太を売っても金にならないんですから、あなたの待遇をよくすることができない組合なんです。何とか食っていくぐらいの程度なんです。それでもよかったら、よく考えて改めて入りたいと言ってください」と。それでも、しばらくすると、それぞれ入ってきて、そのうち結婚して子どもが生まれた者もいるというんですね。

木工所なんかでもそうなんです。国際基督教大学を卒業した優秀な人が、木工をやらせてくれと私のところへ来た。「あなたの人生を誤らせるとは困るから、そう単純に、はい来てくださいとは言えない」と、いろんなことを話して返したんです。そうしたら一月になって母親と来て、またやらせてくれという。「お母さん、大丈夫ですか。よく家じゅうで相談してくださいよ」と。そしたら二月に、親父さんと来た。

上野村の木工所には、江戸指し物三〇年の職人がいまして、機械なんかも使って教えました。半年もたつとちよつとしたものを削って売りに出せるようになった。そしてしばらく一年くらいしてから、いきなり自分の同窓生の女性を連れてきて、「この人と結婚するんだけど、役

場で使ってくれないか」と言う。「試験があるよ」と言う。「どうぞ試験してください」と。きちんと試験したら、何と成績がいいんです。役場で働いてもらうことにした。そのうち、本人も木工所から独立して、どんどんつくるようになり、やがて子どもが生まれると細君も家庭に入りました。いまでは二人の子どもを抱えて、注文も積極的にとってがんばっているんです。

そういうふう新しい価値判断をする人間がどんどん出てきている。これは新しい時代ですよ。それがまた、私ども山村の町村長を勇気づけてくれます。

森 確かに、そういう方々は世の中の動きを先取りする人たちですね。新しい価値観のあらわれでしょう。昔は落ちぶれて地方に行くということにもなっていたんだけれども、今は地方定住の方が進んでいる。最も先端をいく人たちが上野村に入り始めたというわけです。そんなふうに、世の中は明らかに変わりつつある。新しい芽が、いろんなところで出始めていますね。

黒澤 ですから、首長というのは単なる上っ面の仕事をしてはいけません。心の底から、わが町、わが村はどうあるべきか考えて、行動する。徹底的に置かれた立場を分析し、将来を眺め、どうやったら村人、町の住民が希望を持てるような桃源郷をつくれるか、それを見定めなければならぬと思います。

森 どうもありがとうございます。

土

と

木

第三回

高垣睦城

青べか

日刊建設工業新聞社 取締役企画局長

東京に隣接する千葉県浦安市に住んで二〇年が過ぎた。この間、地方勤務があつて八年ほどこの町を留守にしたが、それを除けば住民の一人としてずっとこの町の街づくりを眺めてきたことになる。それにしても、ひと頃、都市成長率日本一と言われたこの町の二〇年間の変貌ぶりは凄い。

かつてこの町は「青べかの町」と呼ばれていた。べか舟と呼ばれる小さな舟を操ってノリの養殖やアサリ漁を営む漁師の町であった。それも、そんな遠い昔のことではない。わが国の経済がまだ高度成長を続けている昭和四〇年代の半ば頃までは、そんな漁師町だったのである。

青べかの町としての浦安を全国に知らしめる

こととなったのは、山本周五郎の小説『青べか物語』にあるだろう。周五郎は、大正の末から昭和の初めにかけての三年間、この町に住んだ。小説の冒頭に当時の町の様子が紹介されている。

「浦柏町は根戸川のもっとも下流にある漁師町で、貝と海苔と釣場とで知られていた。町はさして大きくはないが、貝の罐詰工場と、貝殻を焼いて石灰を作る工場と、冬から春にかけて無数にできる海苔干し場と、そして、魚釣りに来る客のための釣舟屋と、ごったくやといわれる小料理屋の多いのが、他の町とは違った性格をみせていた」

文中にある浦柏町とはもとより浦安、根戸川

とは東京都江戸川区と浦安の間を流れる旧江戸川のことである。

さて、横浜市郊外から埋立地の先にある今の住まい先に引越してきたのは、昭和五年の暮れであつたらうか。第一期の埋立事業が完了して間もなくの頃で、第二期の埋立事業がまだ続いていた。住宅地の周囲には、埋立砂漠とも言つていいような殺風景な空地が手つかずに広がっていた。

浦安沖の海面埋立事業が本格化したのは、昭和三九年秋からのことであるが、そこに至るまでには、漁業を生業とする漁民との間で幾多の葛藤があつたようである。

その六年前の昭和三三年には、本州製紙江戸川工場からの排水による魚介類の大量死滅が発生し、工場に押しかけた漁民との間で大乱闘事件が起きた。後に「公共水域の水質の保全に関する法律」ができたのは、この事件が発端という。

しかし、その後も漁場汚染は深刻化する一方で、しかも京葉工業地帯形成のための海面埋立が進行するという状況の中にあつて、浦安の漁民は、四六年には漁業権を全面放棄するに至り、青べかの町としての浦安は終わりを告げる。

東京に隣接する町でありながら、陸の孤島といわれるほど交通の不便をかこつていた浦安に、地下鉄東西線が開通し駅が開業したのは昭和四四年三月のこと。これを契機に東京のベッドタ

ウンとしての都市化が進行しはじめる。

最終の第二期埋立事業が完了するのは昭和五六年三月。これによって町の面積は埋立前の四倍に膨れ上がり、人口もその頃には六万人（現在約一三万人）に増えて、その年の四月に待望の市制施行を果たす。

引越したばかりの住宅地の周囲には殺風景な空地が広がっていたと書いたが、「緑あふれる海浜都市」を目指す埋立地での街づくりは今始まったばかりであったのだからやむを得ない。

だが、直ぐに既成の町では得られない楽しみがあることに気がついた。街がでるまでを見る楽しみである。無から有へ―街づくりに限らないが、モノがでるまでを目にするのは実に楽しいことだと思ふ。

ただっ広いだけの空地に道路が敷かれ、区画が輪郭を顕わし、街路樹が植えられ、やがて施設の建設がはじまる。

その施設は高層住宅であったり、学校や図書館・公民館・消防署・病院であったり、あるいはスーパー・銀行などの店舗であったり、ホテルであったり、公園や墓地であったり―新しい街づくりに向けていろいろな施設が次々と姿を現し始める。

休日になると、自転車を駆って街づくりの現場を散歩がてら見て歩くのが習慣となった。中でも、楽しみは公園づくりの現場であった。

空地だった所に大量の土が運ばれ、ブルドー

ザーによって幾度となく盛土されたり均されたりしながら、次第に公園らしい姿に形づくられていく。やがて幾種類もの樹木や草花が植えられ、芝生や園路、ベンチ、池などが整備されて公園が完成する。この欄のタイトルに即して言えば、公園とはまさに、「土」と「木」が織りなす造形美といつてよいのかもしれない。

公園づくりと言えば、旧江戸川をはさんで浦安の隣りにある葛西臨海公園のできるまでを通勤電車の窓から眺めるのが、ひと頃の朝の通勤の楽しみであった。

この公園は、昭和六〇年一月から葛西沖開発土地区画整理事業の一環として着手され、平成元年にその一部が、平成六年四月には鳥類園ゾーンが、そして翌年に公園中央部のなだらかな丘の上に東京湾が一望できる展望レストハウスができて、公園の整備を終えた。

公園に隣接して走る高架のJR京葉線電車の窓からは、眼下に公園全体を見渡すことができ、建設中の現場は手に取るように見えた。土が運ばれ、土が動き、土が形を作っていく。埋立を終えた頃には、単に広漠とした更地に過ぎなかった空間が、土によってこんなにも変化するものかと、改めて感じ入った。

自宅からこの公園までは、自転車で一五分くらい。オープンしてからこれまでに何度も散策に訪れているが、植えられている樹木の成長を見るのも公園散策の楽しみの一つだ。何しろこ

の公園は、八〇分の面積を有する都立公園の中でも最大規模の公園だから、自転車で海などを眺めながら散策していると、すぐに一時間や二時間はたつてしまう。この夏休みにも、早起きして三度ほど行ってきた。

浦安のことから話がそれってしまった。浦安のことに話を戻す。

今やこの町のシンボルともなっている東京デイズニールランドが昭和五八年四月にオープンして、今年で一五周年を迎えた。わが国におけるテーマパークの先駆けとして、あるいはその成功例として語られることが多いが、何はともあれこのテーマパークの意義は、日本人に遊園地遊びの楽しさを教えたことだろう。

近くに住んでいながら、まだ二度ほどしか訪れていないが、本格的な遊園地は大人でも十分に楽しめることを実感した。また、そうでなければ、年間一千万人ももの入園者を集めることはできない。遊園地とは優れてフィクションの世界であり、小説であれ何であれ、筋立てのしっかりしたフィクションに人は感動を覚えるのである。

このテーマパークで、また大量の土が動き出している。海をテーマとする第二テーマパーク「東京デイズニール」の建設が始まったのだ。新たなフィクションの筋立てがどんなものなのか、少なからず興味がある。

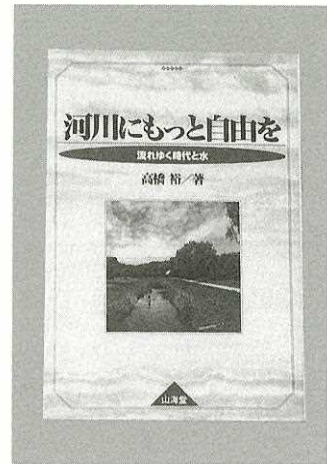
『河川にもっと自由を』

流れゆく時代と水

高橋 裕／著

発行：山海堂

定価：1,905円（本体）



戦後一貫して河川工学の調査、研究、教育に携わってきた著者が、折々に雑誌等に発表した比較的短い文章を年代順にまとめたエッセイ集である。河川行政についての提言や河川技術者のあるべき姿、あるいは一般の人たちが川をどうとらえるべきであるかなど、さまざまな角度から川について論じている。

もっとも古いものは、もはや40年も前の文章であるが、考え方としては今も変わらないことは、河川という自然公物のもっているタイムスケールからいって当然のことであろう。

提言の中には、未だ実現していないものもある一方、今や誰疑うことなく当たり前のこととして実現しているものもある。前者の典型が、例えば地下水に関する法律であり（「陽の目を浴びない法案」）、後者の例としてわかりやすいものを挙げれば、国道や列車の窓から見える河川名である（「川に標札を立てよう」）。

すでに実現しているものについての提言など、ある意味で採録する必要はないとする考え方もあろう。しかし、若い人たちに何の疑問もなく実施していることについても、それなりの紆余曲折を経て実行されているのだということを知ることは、単に

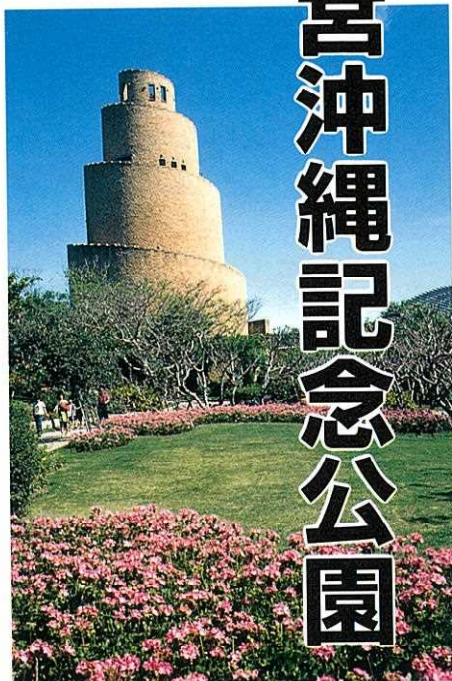
歴史を知るという意味合いだけではなく、今後の仕事の進め方を考えるうえで、大いに参考になるはずであるし、また物事を固定的に考えてはならないという教訓にもなっていよう。

ことあるごとに強調されているのは、川そのものを見つめることの重要性である。研究が進み、技術が進歩し、各種の工事の事例が増えるに従って、マニュアルも完備されてきて、通り一遍の仕事であれば、深く考えることもなくこなせるようになってきているが、本当にそれで十分なのだろうか。一つひとつの川、そしてその流域を見つめることをしなければ、必ずや何らかの形でしっぺ返しを食うことになるのではないか。それが思いも寄らない災害という形で現れることになる。

このようなエッセイの編集に当たっては、テーマ別に分類することも当然考えられるが、本書の場合は発表順としている。それが、奇しくも戦後の河川工学ないし河川行政の考え方の変遷を示すような結果となっており、著者が意図しているかどうかはわからないが、本文中でその重要性を繰り返し強調している治水の歴史を知るうえでの文献ともとらえることができる内容となっている。

沖縄振興の 拠点をめざして

国営沖縄記念公園



熱帯ドリームセンター

国営公園は、国の設置する営造物公園として、都市公園のうちの大規模公園に位置づけられ、現在全国で十六ヶ所が事業化され、そのうち十三ヶ所が供用開始されている。

そのなかで、国営沖縄記念公園は、全国で五番目に事業化された国営公園であり、昭和五〇年に開催された沖縄国際海洋博覧会を記念する海洋博覧会地区と、沖縄の復帰を記念する首里城地区の二ヶ所を持つ国営公園として、開園以來多くの集客を得て親しまれている。

海洋博公園と首里城公園

本部町に位置し、昭和五十一年から開園した海洋博公園のテーマは、「太陽と花と海」。主な施設は、水族館、海洋文化館、人工ビーチ、熱帯ドリームセンター、おきなわ郷土村等の施設が

あり、海との調和、亜熱帯性気候等を配慮した沖縄らしさが追求されている。

例えば平成九年の統計によると、沖縄の観光客数三九〇万人のうち、一七〇万人が海洋博公園を訪れている。年間行事も盛んで、海洋博公園では、花火大会、トリムマラソン大会、花のカーニバルなどが行われ、首里城地区では、琉球王朝中秋の宴、首里城祭等が開催されている。「本部に立地して沖縄北部振興の拠点となり、さらには沖縄全体の活性化を図りたい」と語る国営沖縄記念公園事務所の井口義也所長によると、いま一番力を入れているプロジェクトは、新水族館づくりだという。

「昨今、目の肥えている客にどうアピールしていくか」、新水族館づくりでは、これまでの研究実績を生かし、自然の海水を利用しながら



首里城正殿



水族館

世界に誇る沖縄の美しい熱帯海域、そこに生息する海洋生物たちを、世界規模の海洋楽園オセアニックワールドで展開していく計画だ。その本格工事は今年二月に始まり、平成一四年（復帰三〇周年）の完成をめざす。世界一の大パノラマで巨大ジンベイザメの垂直摂餌シーンを観覧できる準備も着々と進んでいる。

かつて、城が巨大な祭事空間だった首里城も、いま貴重な文化遺産として、国営沖縄記念公園の管轄で復元整備が進んでいる。海洋博地区と首里城地区、ともに歴史・文化の拠点として沖縄全体の充実とさらなる振興をめざす。

り合わせると八〇〇ヘクタール近い緑の塊を保有していることになる。このバンセンヌの森に三五ヘクタールの花の公園があり、市民に親しまれている。花のとり扱いは空、森、林、池、噴水をトータル空間としてとらえたもので、枠の中の花壇というものではない。これこそ、フロリスケープの極みといえるのであろう。(写真④)

この公園には九〇〇〇平方メートルの常設展示館と一〇〇〇平方メートル前後のパビリオン催事棟が二〇棟以上あり、市民の花文化活動に使われている。

東京とパリ市との姉妹都市締結後の一九八三年に国際バラ博覧会にバラを出展してとのシラク市長よりの要請がありお手伝いしたときのこと、サラザール駅近くの小さなホテルに宿をとったわれわれにバラの花束と極上のワインをシラク市長名で提供してくれたのには驚いた。展示出典のための日本人のアルバイターに対する気くばりは何から来ているのか、日本でお目にかかったことのない珍事であった。冷静になると花文化としか思えないのである。今、日本の各界のトップに欠けているのは心のゆとりではないのか、つまり花のもっているやさしさ、豊かさ、温かさから、生命の大切さを原点に戻って反芻してほしいと思う。

「アメリカ」

テキサス州にある国立ワイルドフラワーセン

ターを紹介しよう。テキサス州は約七〇万平方キロで、日本の三八万平方キロよりはるかに広い。著名なアラモの砦近くに位置する広大な敷地は一面野生の花畑で、はじめから国立であったわけではない。ジョンソン大統領が辞するに当り誰よりも雀躍りして喜んだのは夫人のパード・ジョンソンさんだ。ホワイトハウスから脱け出て、幼女のころとんだり跳ねたりして遊んだテキサスの大地に帰り余生を愉しもうと常々考えていたからである。土地と資産を提供してくれたのは大統領。花をまいて育てたのは夫人、とれた種子は全米のハイウェイ沿道にまかれ多くのドライバー、沿線住民に喜ばれた。テキサ

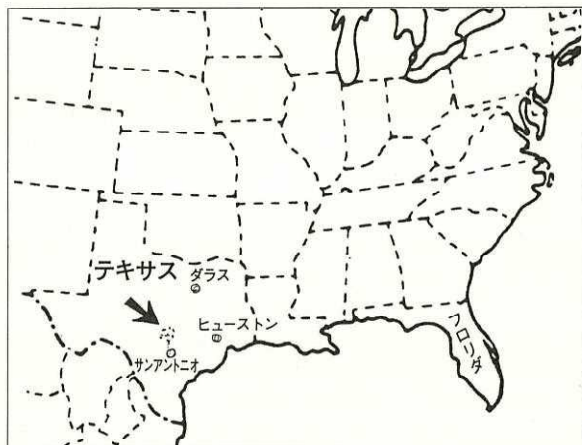


図 アメリカ国立ワイルドフラワーセンター

ス中にひろまり有名になると若いドクター級が大勢手伝いに来て、とうとう国立研究所になったというのである。一九八五年にテキサスだけでなく全米の国土九三六万平方キロを対象にした「野草美化法案」が連邦議会を通過、野の花をハイウェイに植える運動が始まり、今では道路管理のハイウェイ局に問い合わせると、種類、花どきなどの情報サービスが得られるという。シンクタンクの大学、試験場がバックアップしていることはまちがいないであろう。冒頭にかいたように地球を美化している実践例で一四年前の話だ。(図参照)

「日本」

外国ばかりに目を向けているのではない、日本の事例をこのさい紹介しよう。(写真⑤、⑥)

紅葉谷川庭園砂防として知られている造園風溪流工事の事例である。場所は広島県宮島で、昭和二三年から五ヶ年を費やしての名作品である。指導監理は東大農学部の日羽鼎三教授と文部省文化財専門家。日羽教授は菊の専門家でいわば園芸家、東大農学部第二園芸研究室を創始した学者だ。昭和二〇年の枕崎台風で後背地の山頂からの土石流が、中流に巨石を堆積し、さらに流下して、厳島神社の境内を二万立方メートルの土砂で覆ってしまったという大災害を受けたことが、この工事の発端という。

二度とこのような災害をださないという決意で練った案が次のような五ヶ条で、しかも堅く

守りながらの施工でできあがったのが、世紀の造園風溪流護岸の姿である。

一、巨石、大小の石材は絶対に傷つけず、また割らない。野面のまま使用する。

二、樹木は切らない。

三、コンクリートの面は眼にふれないように野面石で包む。

四、石材は他地方より運び入れない。現地に
あるものを使用する。

五、庭園師に仕事をしてもらう。いわゆる石屋さんも、のみや金槌は使用しない。

この五ヶ条を何回もかみしめて、出来上がった作品を見ると、これからの日本の大小の河川の護岸はこうあるべきだと思えるのは筆者だけだろうか。現今、河川関係者はビオトープ、親水緑化の大合唱だが、丹羽先生の快挙をもっと早くから全国の土木行政に反映しなかったことに責任の一端を感じざるを得ない。

現地に広島県が立てた看板には、昭和四九年に来日したウィーン大学の砂防専門家アウリツキー教授が、自然美と工学的技術の融合した紅葉谷川と絶賛されたと記してある。

筆者が不覚と恥じたのは、菊を通してしか知らなかった丹羽先生が立派な修景土木家であったということだ。

だからこそこれからの河川工事には花と緑豊かなフロリスケープの専門家を参画してほしいといいたい。

フロリスケープの効果と対象空間

花の造園―フロリスケープの創出の効果をとりまとめると次のようになる。

①景観向上効果―緑では得られない色彩豊かな四季の景観が楽しめる。また、地域や施設などの個性、シンボル性を生みだす。(次回はフロリスケープの施工、高速道路での実験―実用化の工法を紹介する予定)

②意識向上効果―花のある風景に身近に接することにより、行政、市民双方の居住環境に対する愛着心や誇りが生まれる。同時に緑の大切さ、緑化推進にも理解が深まり、さらに展開すると地球環境への関心も高まる。

③コミュニケーション効果―花を育てる、眺める、飾ることを通して人々のコミュニケーションがはかられ、思いやり、助け合い、優しさの精神が醸成される。

④心身保養効果―花を育てることによる土のふれあい、作業時の運動が心身の健康に直結する。人間の誠意・丹精に正直に答えてくれるのが花である。欧米では四〇年も前から医療園芸 Hortitherapy として医療効果をあげている。

⑤文化的効果―日常的に花と接することにより美意識を育て、芸術、工芸、手芸創作など文化的生活を営む刺激となる。

⑥経済的効果―地域の花弁産業、観光産業が盛

んになる。花のイベント、即売など地域経済の活性化につながる。全国都市緑化フェア、全国フラワーフェスティバル、道路空間活用道の駅、ハイウェイオアシスなど。

⑦人間性の回復―花を通しての生命の大切さ、優しさ、思いやりを体得し、潤いのある社会の実現に貢献する。

以上が効果だが、最近、日本列島庭園化―ガーデンアイランド構想が国土審議会で提案されているのも大いなる助人であろう。

そして対象空間は無限に広がるあらゆる空間ということにつぎるが、紹介した事例はほんの一部である。

核―公園・緑地、広場、屋上、アトリウム、室内など。

軸―河川敷、道路、鉄道など。

点景―農地、林地、市街地など。

とくに、有林地、斜面の活用は公有地、民有地を問わず、景観は国民の共有財産というコンセンサスをとりつけながら進める必要がある。

以上、フロリスケープの意義を内外の事例を交えて展開した。枠の花壇ではない、拡がりのある花風景の創出こそが人の心を肥らえると思う。大地に根ざす技術としての共通の接点を土木、建築分野と模索するときでもあろう。

もぐ 潜り橋

松村 博

（大阪府大阪市都市工学情報センター
常務理事）

飛鳥川の石橋

日本人は川の流れに逆らわない橋を工夫してきた。その一つに潜り橋（沈下橋）がある。日本の川は普段は水位が低いから低い橋でも十分に渡ることができる。一たび雨が降ると急に水位が上がり、橋は水の中に隠れてしまうが、橋は水の抵抗をできるだけ小さくするように作られており、水位が下がるのを待つ。

このような橋の原形は万葉集に石橋（いわはし）と表現された飛び石と言えるのではない。石橋は川の瀬に石を並べただけの簡単な渡河施設であると考えられている。増水すると簡単に壊されてしまうような、もろく、はかない橋に万葉の歌人達は人の心や運命の移り変わりを感じた。石橋は飛鳥に住んだ人々にとってなじみ深いものであったのだろう。万葉集に故郷の飛鳥をしのんで作った次のような歌がある。

年月も 今だ経なくに 明日香川 瀬々ゆ
渡しし 石橋もなし（巻三 一一二六）

飛鳥川には近年までいくつもの「石橋」があった。古代から「流されては作り替え」を繰り返してきたものであろう。そして現在、明日香村大字稲渕に一つの石橋を見ることができ、かつては農作業に行く人々によって維持されてきたが、時代の変化と共に手が加えられなくなって失われたが、熱心な万葉愛好者などの保存運動の結果、復旧されたものである。

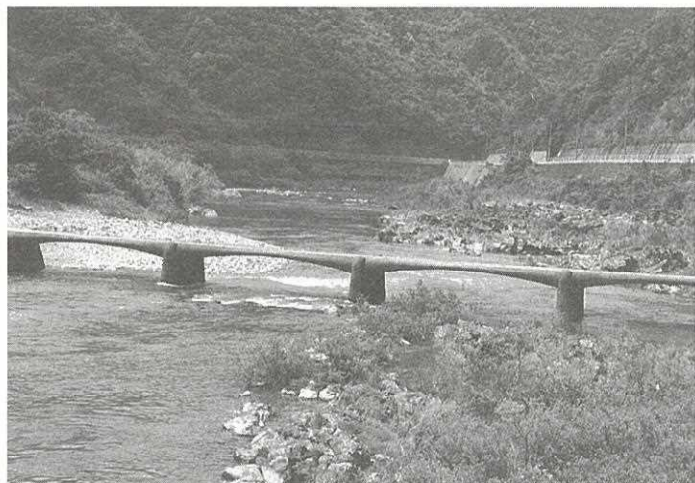
簡単な橋脚の上に板石を並べたような潜り橋は、かなり古い時代から架けられているように思えるが、それを示す絵などは残されていない。あまりにも簡易な石橋は人の関心と呼ぶこともなかったであろう。

四万十川の沈下橋

高知の四万十川にはその支流を含めると四〇

を越える沈下橋が架けられている。本流だけを見ても最上流の大野見村から最下流の中村市までの間に二二橋の沈下橋がある。四万十川には沈下橋がほんとうによく似合う。両側の高い山の間を水量豊かな清流が流れる中に水面に接するようにつくられた橋の姿は、周辺の広大な風景に溶け込み、ずっと古い時代からの日本の原風景のように思えてくる。しかし、四万十川に沈下橋が架けられるようになったのはそれほど古いことではない。大半の橋が昭和三〇年代から四〇年代に架けられたもので、沈下橋の風景はごく近年のものであることがわかる。沈下橋がある種の郷愁をもって見られるのは、その後の日本の風景の変化が激しすぎたためか、自然とうまく調和しながら生きる日本人の心が沈下橋の形に込められているためであろうか。

その中で最も古いものが窪川町の一斗俵沈下橋で、町の記録では昭和一〇年の完成となっている。同じころ支流も含めて三〜四橋が架設されたようだが、今は残っていない。それ以前の橋は、簡単な板橋か、丸太を束ねたような橋で、板や丸木に綱が取り付けられ、水が出ると、一方の端を離して対岸の方で取り上げて流失を未然に防いだという。このような橋ではたまた足を踏みはずして落ちる人もあって大変危険であった。このため永久橋の架設が望まれたが、予算が十分ではなく、本格的な橋の代わりに沈下橋が選択されることになった。



美しい曲線を見せる向山橋（高知県幡豆郡大正町）

沈下橋の構造は川底を掘って簡単な直接基礎をつくり、コンクリート製の躯体を建ち上げ、その上に鉄筋コンクリートの床板を乗せたものがほとんどである。下流部では鋼またはコンクリート製の杭を用いたパイルベント式も見られる。橋脚の躯体は両側を丸くし、水の抵抗を少なくする形になっている。上部工は両端に丸みを持たせた床板を置いただけで、高欄も何もつけられていない。沈下橋のデザインは装飾的な

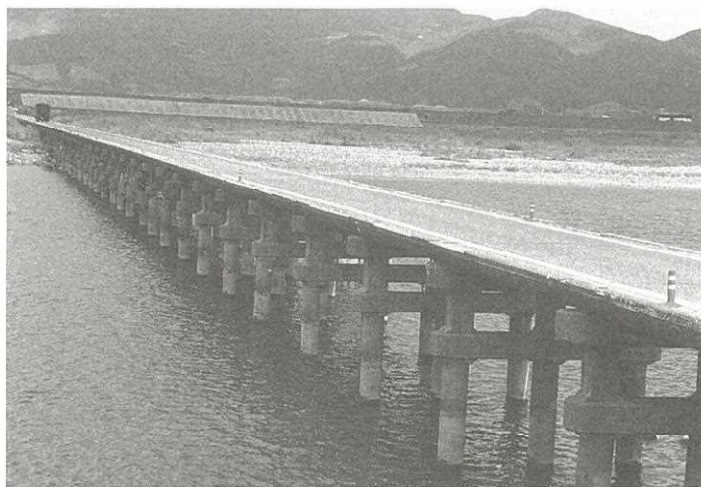
要素は全くなく、非常にシンプルである。しかし橋脚も床版も角が丸く作られているので、柔らかな陰影を川面に映す。これが沈下橋の印象を高めている。ほとんどの橋が自動車を通すことができる。中にはダンプカーが走っている橋もある。沈下橋の規模としては、橋長二九二メートルの今成橋（中村市）を始め、橋長一〇〇メートルを越える橋が九橋もある。ただ幅は三〜四メートル、狭いため橋の上での車のすれ違いは難しい。

四万十川になぜこれほど多くの沈下橋が架けられたのかを説明する確かな材料をもっていない。前述のように水量豊かな川を渡るためには永久橋の架設が望まれたが、多額の建設費が必要となるため比較的安価な沈下橋が選ばれたのが第一の理由であろう。

一方、沈下橋が多く架けられるようになったのは、川の水運が衰退した後のことであると考えられる。川に大型の船や帆をもった船が運航している間は沈下橋のようなクリアランスの低い橋を架けるのは難しかったはずである。

各地の沈下橋

このような沈下橋は日本の各地で見ることができ、同じ高知の仁淀川の中流域にもいくつかの沈下橋が架けられている。また、四国地方最大の川、吉野川でも比較的安価にできる沈下橋（潜水橋）が昭和二〇年代後半から三〇年代にかけて数多く建設された。沈下橋は洪水時に



日本最長のもぐり橋・高瀬橋（徳島県板野郡上板町～名西郡石井町）

は水没して通行不能となるが、両地域の連絡には大変貴重な橋である。吉野川には最下流の高瀬橋から上流へ約一〇橋の沈下橋があり、ほとんどが県道の一部としての役割を果たしている。高瀬橋は県道徳島吉野線の一部として昭和二九年八月に架けられた。幅員は四メートルであるが、橋長は五二二メートルもあり、管見の限りでは日本最長の沈下橋である。



狭山池にみる土木工事

(近世編)

大阪府土木部ダム砂防課
狭山池ダム資料館(仮称)開設準備室

有井宏子

木製枠工

前回お話ししました、中世における東大寺再建の中心人物、重源が設置した石樋は、その後の改修工事で、いったんは撤去されました。石樋の部材がふたたび利用されたのは、慶長十三(一六〇八)年の大改修の時です。これを「慶長の改修工事」と呼んでいます。この工事では、豊臣秀頼の命により、片桐且元が采配をふるいました。存じのとおりに豊臣秀頼は太閤秀吉の子、片桐且元は豊臣家二代に仕えた家臣です。

このとき、天下はすでに徳川家康のもの。豊臣家は、主として今の大阪市を中心とした地域を領地とするだけの、一大名になり下がっていました。豊臣家は、わずかに残された領地における農業生産の安定と向上を図って、荒廃していた狭山池を修復したと考えられます。

では、慶長の改修工事の規模、概要はどのようなものだったのでしょうか。

北堤の土層断面をみる限りでは、この改修時の嵩上は、わずか一メートルほどです。したがって、堤の嵩上によって貯水量が大幅にアップしたとは考えられません。慶長の改修工事は、取水設備の改善に力点が置かれたといえます。

実際に、発掘調査によって、中樋、西樋、東樋の三つの樋の存在が確認されました。これら三つの樋を通じて、狭山池の水下にある、百数十の子池に水を供給したのです。

慶長の改修工事のときに、中樋および西樋に設置された取水施設は、「尺八樋」という型式で

す。尺八樋は、溜池の堤に沿って斜樋を設置し、これにいくつかの取水孔を設け、使用しないときは木栓を打つ構造が基本です。斜樋の見た目が、楽器の尺八に似ているので、この名がついています。溜池の水位が下がるにしたがって、順次下の栓を抜いていって、取水します。

狭山池の尺八樋は、この孔に短い管が連結され、その前に三方を板で囲った水門を設置し、戸板を開閉して取水する設備をもっています。高さが約三メートルという、大きなものです。中樋、西樋ともに、この取水設備が四段ありました(図①)。狭山池の尺八樋は、基本的にはつくられたときの姿のまま、大正時代まで三百年以上、使用されていました。

中樋の底部前方の両側には、板材を「ハ」の字型に立てて、固定した施設がありました。これは、樋に向かって流れこむ水流による浸食から堤体を保護し、合わせて樋への土砂の流入も防ぐために設置された、一種の護岸です。

さらに、この護岸の両側には、古墳時代の石棺を、上下二段に重ねて、石垣状に積んだ施設が残っていました。ここで使用されていた石棺が、冒頭に書きましたとおり、鎌倉時代に重源が設置した石樋の転用なのです。

このような巨石を使用した石垣は、日本ではこの頃に初めて現れた、土木の新技術です。その代表が、大坂城の石垣です。慶長の改修には当時の築城技術が応用されたといえます。

さらに、中樋西側と西樋の両側に、このとき設置されたと思われる杵工も残っていました。

杵工は、まず堤長方向に約三メートルの間隔で、丸太材の先端部分を斜めに埋め込みます。次に、堤長と垂直方向に、前後二列に斜め方向の杭を打ち込みます。続いて横木をホゾ穴に通して前後左右に連結します。その後、杵の内部に土を充填します。このとき、池側の面には、水平方向に竹を敷き並べ、垂直方向には、丸太材の間に等間隔で角材を打ち込んで壁面を保護するという丁寧な補強をしています(図②)。

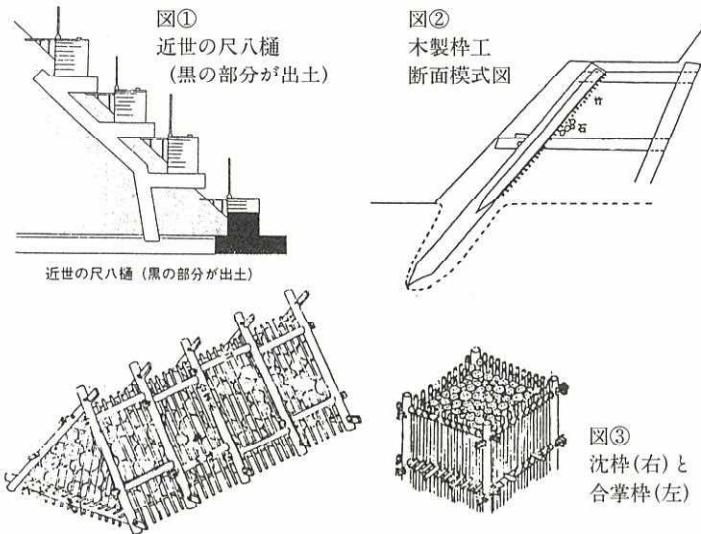
この杵工は、堤体を水圧や洗掘から保護する役目を担っていたようです。

江戸時代以降の水制や護岸のための杵類のうち、狭山池の杵工に類似するものには、杵内部に詰石をして設置する「合掌杵」や「沈杵」、沈杵の連続体である「続杵」などが知られています(図③)。これらの杵類は、河岸や堤に接して設置し、堤本体に直接設置するものではありません。狭山池の杵工は、これまで知られていない、新発見の護岸方法でした。現代の法杵工法、アンカー工法、二重矢板工法などに通じる一面もあると考えられています。

さて、西樋と中樋は大正時代まで使われていたもので、所在地が知られていました。けれども、東樋については、「かつてカナヒ(金樋)が存在した」という伝承が残っていただけで実在するかどうかも分からない状況でした。

狭山池がつくられた、西暦六一六年頃に設置された樋は、前々回お話ししたとおり、現在「東樋下層遺構」と呼ばれています。切りぬいた丸太を連結した、全長七三mの導水管が、ほぼ完全に残っていました。その真上に、慶長の改修工事で設置された新しい樋が、これもまたほとんど完全に残っていました。これを「東樋上層遺構」と呼んでいます。他の二つと違って、東樋は尺八樋ではなく、一段だけでした。

千年も前の樋と同位置にあるのは、予備調査



による判断が一致した結果でしょう。合目的、効率重視の土木事業らしい一致といえます。

東樋は、箱型に組み合わせた板材を連結したものでした。箱型の導水管は、近世に出現したと考えられています。ここでは、釘の周り、板と板の間に、樹皮を詰めていました。これは、今でも船大工が用いる、水密技法と同じです。西樋や中樋の護岸設備では、船材を多数、再使用していましたし、樋の製作に船大工が関わったのは間違いありません。再使用されていた船材は、戦国時代や安土・桃山時代の軍船の可能性が高いそうです。秀吉の朝鮮出兵の軍船では?とも考えることができそうです。

このように、狭山池の慶長の改修工事では、土木技術以外に、最新の築城技術や造船技術が応用されていました。これはもちろん、施主が豊臣家だったからこそ、といえます。

ただ、堤の機能維持のために、積極的な洪水対策が講じられたとはいえません。もともと日本人には、自然の脅威に対する諦めがあり、防災概念はあまり発達していなかったようです。

最終回は、西欧近代土木工学による、大正から昭和にかけての改修と、現在行われている平成の大改修工事をご紹介します。

〈参考文献〉

- 「図録 農民生活史事典」一九九一年
- 「復元 技術と暮らしの世界史」一九九八年
- 「日本農書全集」第八五巻(開発と保全)一九九七年

ゼロ

哩マイルからの出発

第3回

太平洋戦争から新幹線まで

財団法人鉄道総合技術研究所主任技師

小野田 滋

戦時下の鉄道

一九四一（昭和一六）年、真珠湾攻撃をきっかけとして日本は太平洋戦争へと突入し、鉄道もその渦の中に大きく飲み込まれることとなった。当時の鉄道は、物資や兵員の輸送に不可欠な交通手段として兵器に準じるものと位置付けられ、鉄道輸送は軍事輸送を最優先とする体制へと移行した。すでに一九三八（昭和一三）年には陸上交通事業調整法が成立し、特に大都市圏における交通機関の統制が強化され、競合関係にある私鉄の合併が促進された。また、一九四一（昭和一六）年以降は、地方私鉄の国有化も行われ、特に戦時輸送上必要な路線を中心と

して二七社におよぶ私鉄が国に買収された。

さらに戦争の激化とともに不急不要な輸送の拒絶、特急列車の廃止、男性の応召に伴う女性職員の登場など、戦時輸送体制の強化が行われ、本土空襲の本格化に伴って学童の疎開輸送も開始された。こうした情勢にあつて、本州と九州を結ぶ関門トンネルは、大陸への生命線として戦時中にもかかわらず工事が進められた。工事は、シールド工法、圧気工法などを併用して一九四二（昭和一七）年に完成し、世界最初の海底トンネル（水底トンネルはいくつかの事例がある）となった。しかし、新たな技術開発は戦争のためにほとんど中断され、代用材や代用燃料の研究など、戦争遂行に必要なものに限られた。

終戦を告げる玉音放送が流れた一九四五（昭和二〇）年八月十五日、すべてが虚脱した瞬間にあつて、「鉄道は動いている」という事実は国民に明るい希望の灯をともしたが、このエピソードは鉄道人の誇りとして今なお語り継がれている。

戦災からの復興

終戦後にまず鉄道が取組まなければならなかったのは、空襲などで破壊された鉄道施設や車両の早期復旧であつた。これに加えて生活物資をはじめ、疎開学童や大陸からの引揚者を大量に輸送する必要があるが生じ、さらに追い打ちをかけるようにインフレの波と動力資源の欠乏が鉄道輸送を圧迫することとなった。

一方、鉄道行政は敗戦と共に日本に進駐した連合軍総司令部（GHQ）第三鉄道輸送司令部がこれを掌握し、ここを窓口として鉄道に対する連合軍側の施策が伝達された。特に一九四八（昭和二三）年九月八日のマッカーサー書簡に端を発する国有鉄道の公共企業体化は、ただちに至上命令として実行に移され、翌年六月一日に日本国有鉄道が発足した。当時、国鉄では南滿州鉄道など大陸からの引揚者を大量に受け入れたため、人員合理化をめぐる鋭化した労働組合と深刻な対立を迎え、発足直後に発生した下山事件、三鷹事件、松川事件は労使の間に深

い溝を残し、それ以後の鉄道経営にも暗い影を落とすこととなった。

このように昭和二十年代の鉄道は荒廃と混乱の時代であったが、関係者は不眠不休の努力を続け、輸送力の確保に全力を傾けてこの難局を乗り切った。

復活する鉄道技術

戦争を挟んでほとんど途絶していた新技術への挑戦も、震災復興が一段落した昭和二十年代後半から復活の兆しを見せ、長かったブランクをいち早く埋めるべく努力がなされた。ことに軍部の反対（送電設備に万一のことがあると列車の運転が不可能になるというもの）により大都市近郊以外に普及しなかった鉄道電化は、一九四七（昭和二二）年の上越線電化を皮切りとして徐々に伸展し、一九五六（昭和三一）年には待望の東海道本線全線電化が完成した。さらに、ヨーロッパで実用化が開始されたばかりの交流電化も導入され、仙山線における試験を経て一九五七（昭和三二）年には北陸本線で初めて実用化された。交流電化は大出力の列車運転に適した電化方式としてその後も改良が続けられ、新幹線の実現へとつながった。

また、鉄道電化の伸展とともに長距離を走破する電車列車が登場し、非電化区間で活躍を開始した気動車列車とともに、いわゆる動力分散



被災した東京駅とホーム 「国鉄百年写真史」国鉄(1972)より

方式（動力が先頭の機関車だけに集中するのではなく各車両に分散する方式）が普及しはじめた。これに伴って、列車のスピードアップも図られ、一九五八（昭和三三）年に登場したビジネス特急「こだま」は東京―大阪間を六時間五分で走破したほか、一九六〇（昭和三五）年にはクモヤ九三形試験電車が七五%の狭軌世界最高速度（当時）を樹立した。

一方、土木技術の発達も著しく、特にアメリカから各種の工食用機械が輸入され、機械化施

工が急速に普及した。トンネルでは、昭和三〇年代に入って地下鉄工事でシールド工法が実用化されたほか、山岳トンネルの分野ではわが国で初めて延長一〇kmを突破した北陸トンネルが一九六二（昭和三七）年に完成し、長大トンネル時代の端緒を開いた。また、プレストレストコンクリートの技術もこの頃に登場し、一九五四（昭和二九）年に信楽線第一大戸川橋梁で用いられて以来、新しいコンクリート構造として橋梁や建築などに応用された。

しかし、こうした華々しい技術開発の一方で、一九五四（昭和二九）年の洞爺丸事故や翌年の紫雲丸事故といった鉄道連絡船の海難事故をはじめ、一九五一（昭和二六）年の桜木町事故、一九六二（昭和三七）年の三河島事故、翌年の鶴見事故など死者百名を超える重大事故が相次ぎ、鉄道の安全性に対する批判が集中した。こうした痛ましい事故をきっかけとして、A T S（自動列車停止装置）の導入をはじめとする運転保安装置の強化・改良、競合脱線現象の解明などの対策がとられ、より安全な交通機関としての鉄道の実現に努力が払われた。

輸送サービスの向上

昭和二〇年代後半から三〇年代の鉄道で最も大きく変化した点は、車両の改良とそれに伴う輸送サービスの向上であろう。その背景には、



東海道新幹線の開業 「国鉄百年写真史」国鉄(1972)より

車体の全金属化やアルミやステンレス材料の導入による軽量化、動力伝達方式の改良、航空機の技術を応用した車体構造など、様々な新技術の導入があった。

そして、ブルートレインと呼ばれた固定編成による寝台列車「あさかぜ」(一九五八)、東京と大阪間を新幹線開業以前の最速で結んだビジネス特急「こだま」(同)、気動車による長距離列車として上野と青森間に登場した特急「はつかり」(一九六六)、二階建て車両が評判となった近鉄「ビスタカー」(一九五八)、前面を展望

席とした名鉄「パノラマカー」(一九六一)、小田急「NSE」(一九六三)など、従来の鉄道車両には見られなかったスマートで明るく、デラックスな車内設備を誇る新形車両が次々と登場した。また、通勤電車も激増する通勤・通学輸送に対応するため高加速・高減速性能に優れた車両が投入されたほか、非電化の地方ローカル線にも蒸気列車に代わって気動車が普及し、より快適な鉄道輸送が実現した。さらに貨物も、一九五九(昭和三四)年からコンテナ輸送が本格的に開始されたほか、自動車やセメントなどそれぞれの物資に適合した貨車が登場した。

こうした様々な車両の出現は、鉄道におけるサービス改善に大きく貢献し、戦後の終わりへと高度成長時代への突入を人々に実感させた。

新幹線の開業

わが国の鉄道にとって最も輝かしい功績は、新幹線を実現させたことであろう。新幹線の原形ともなった弾丸列車計画は、すでに東京と下関間を九時間で結ぶ広軌別線として一九三八(昭和一三)年頃から議論され、一部のトンネル掘削と用地買収を行っただけで戦争のために工事は中断されていた。一九五五(昭和三〇)年、国鉄総裁に就任した十河信二は、逼迫する東海道本線の輸送状況を打開するための検討をただちに開始し、かつての弾丸列車構想をベースと

して東京と大阪間を約三時間で結ぶ東海道新幹線の実現に乗り出した。当時は自動車や航空機が著しい発達を見せ、鉄道はもはや時代遅れの交通機関であるときさやく声もあり、膨大な工事費を要する新幹線は「ピラミッド、万里の長城、戦艦大和と並ぶ愚挙」とする極論まであった。

しかし、十河総裁は増加の一途をたどる東海道本線の輸送を救済するためには、新幹線の実現こそが必要であるとの信念のもとにこの計画を推進し、一九五九(昭和三四)年、ようやく着工にこぎつけた。常用速度二百km/hを超える高速列車は、わが国はもちろん世界のどの国でもまだ未経験であったが、島秀雄技師長をはじめとするスタッフは、これまでの実績から交流電化で、分散動力による電車列車方式を採用すれば充分可能であるとし、鴨宮付近にモデル線を建設して様々な試験が繰り返された。

東海道新幹線は東京オリンピックに合わせて一九六四(昭和三九)年十月一日に開業を果たし、従来の鉄道の概念をくつがえす大量・高速輸送機関として、世界から注目を集めた。しかし皮肉なことに新幹線が開業した翌年、国鉄の会計は赤字に転じ、以後その額は雪だるま式に増えることとなった。国鉄の技術は新幹線の完成でその頂点をきわめたが、その経営は苦難の時代を迎えることとなるのである。

「会社人間」という言葉を聞いて連想するのは、人により多少の差はあると思うが、会社や組織のためには深夜残業や休日出勤もいとわずに貢献し、個人としては興味も無く、たまの休みにはただ家にいるようなタイプの人を思い浮かべると思う。最近この「会社人間」という言葉は、個人のゆとりの推進や終身雇用制に代表される日本型経営パッシングの中で、とても悪いイメージの言葉となった。自分も、この言葉だけがと他人事のように聞こえるが、いざその意味や内容を聞くと自分も会社人間の中に入ってしまうのかなあと思う。たぶんいま働いている多くの人は、会社人間という枠の中に入ってしまうのではないだろうか。

さて本書のタイトルを見た時、私は最近の風潮に乗った日本型経営の批判書と思ったが、本書はこのような風潮とは逆に、会社人間とはいかに組織において重要であるか、またその価値などを考察し、会社人間の必要性や価値を説いている。またその必要性や価値についても、過去のような会社人間万歳というようなものでもなく、組織一般論の中から会社人間の必要性が示されており、これからの組織のあり方を考える上でもたいへん参考になると思う。(H, T)



田尾 雅夫 著

「会社人間はどこへいく」

中公新書 定価(本体)660円

バブル全盛期の80年代後半から90年代初期、現在の日本の銀行の状況を一体誰が予想したのだろうか。また、当時、不良債権に傷つき、瀕死の状態にあった米銀の再生の行方に注目していた人間が、日本にどれ位いたのだろうか。

あれから10年、状況は全く逆転してしまった。日本の銀行は処理の目途が立たない不良債権の泥沼の中でもがき苦しむ一方、不死鳥のごとく再生した米銀は、健全な財務体質に基づく高い格付けを武器に着々とグローバル化を進めている。この様な状況に至っても、日本の銀行は、未だ自らの進むべき方向を明確に打ち出せずにいる。この状況は一体いつまで続くのだろうか。

本書は、10年前、現在の日本の銀行と同じ様な状況にあった米銀が、どの様にして再生していったかを、個々の具体例に基づいて解説を行っている。シティコープ・トラベラーズ、ネーションズ・バンカメ、メリルリンチ等、現在エクセレントカンパニーと呼ばれる銀行は明確な経営判断に基づき再生を果たしていったのである。その過程において、整理・淘汰は避けられないものであった。

米国の事例がそのまま日本に当てはまる訳ではない。しかし、今後、自由化・競争が避けられない日本の社会において、本書の事例は、どの業界においても参考となるであろう。(T O)



安田 隆二 著
田村 達也

「米銀だけがなぜ強い」

日本経済新聞社 定価(本体)1,500円

九割中流層がつくるそこそこ美しいマチ

～八ヶ岳山ろくをみて～



加藤 忠夫

エッセイスト

はじめに

東京で講師をつとめた帰り中央線で山梨、長野経由で名古屋にもどってきた。

八ヶ岳山ろくの二つの美術館、青春白樺美術館とフィリア美術館をみた後かつて「シルクの都」「糸都」と呼ばれた岡谷にある市立岡谷養蚕糸博物館で日本の製糸業の歴史を学んで帰ってきた。

八ヶ岳山ろくの美術館で考えたこと、岡谷の製糸業の歴史で学んだことを記述してみたい。
一九八〇年代以降、全国にブチ・ミュージアムブーム

八ヶ岳山ろく、信州の高原を訪れる度に思うことは、「日本はゆたかになつたな」「日本民族は世界史上おもしろい実験をしているのかもされない」ということだ。

一九八〇年代、一九九〇年代に日本全国で美術館が急増した。県立美術館の整備はほぼ終わり、市町村立美術館の時代に入っている。

今一つ、国公立ではなく、財団、民間、個人の美術館がふえたのもこの時期だ。

今日訪れた二つの美術館も、この時期個人によって設立された美術館だ。

青春白樺美術館は吉井画廊の吉井長三社長によってパリのアートコロニーにならって芸術家が、そこに住み、移住し、芸術を楽しむ空間として整備している青春芸術村 (Kiyoharu Art Colony) の一施設として一九八三年にオープン

した。

フィリア美術館は、花と牧草と緑の森に囲まれた八ヶ岳高原小淵沢の地に「世界の平和」をテーマに一九九〇年九月、オープンした。

八ヶ岳高原には、こうした美術館、絵本館、ホール、クラフト工房等が多数存在する。信州の高原にもそれこそ星の数ほど存在している。美術館数は、東京都について二位に位置しているのが長野県だという。

そして、その大部分は一九八〇年代、九〇年代にオープンしたものだ。八ヶ岳、信州で目立つのは、脱サラした個人や都会を脱出した芸術家が高原にオープンしたブチ・ミュージアムが多いことだ。

それぞれが、自然との共生、ホンモノへのこだわり、などを追及し、小さいながらもセンスのある、新しいライフスタイルをつくり出しているように思われる。

高原で自然と共生する生活をする人がふえてきた

フィリア美術館のミュージアムショップで購入した本のタイトルは「薪ストーブのある暮らし―八ヶ岳南麓、森の家から―」(筑摩書房、一九九三年、細川英雄・細川たかみ)。本のリードをよむと「東京にはもう住めない！ 親子三人と犬一匹が、薪ストーブを囲みながら見出した、極めつけシンプルで豊かなカントリーライフ」とある。

細川夫妻は東京にある大学の助教授、講師で講義等のある日は片道二時間五〇分の通勤時間をかけて東京に通っている、という。三時間弱の通勤時間がかかっても八ヶ岳のカントリーライフは他のものにもかえりたい、という。

同じ大学教員として、私も信州に居をかまえて遠距離通勤してみるか……そんなことを考えさせる楽しい本ではある。

清春芸術村で入手した「八ヶ岳南麓イラストマップ」をみると、八ヶ岳南麓だけで七つの美術館、三つの音楽ホール、三つのホテル、十二の工房（ハム、そば、木工、酒など）があるそう。そのいくつかを紹介すると次のようになる。

木工小物の「クラフト・パン」。木の素材がやさしいクラフトの店。

「リゾナーレビブレクラブ小淵沢」。八ヶ岳の自然とシティホテルライフを同時に満喫できる。

草木染め工房&ショップの「マザーアース」。茜、栗いが、カモミールなど八ヶ岳の草花で染めたオリジナル毛糸。

「小淵沢絵本美術館」。選びぬかれた欧米の絵本や原画と出会える美術館。

個人の趣味が生活の糧となるゆたかな日本
個人が趣味でやっていることが、商売となる、生活の糧となる一九八〇年代以降の日本。

ある人は脱サラして、ある人は東京を脱出し

て、八ヶ岳の山ろくで、信州の高原でろくろを廻し、木工品をつくり、草木染めにとりくみ、そばをうち、絵をかき、作曲をし……それを工房&ショップで売って生計をたてる。

自分の好きなことを自分の好きな空間でできない、それで生計がたつ。三〇年前の日本では考えられないことが、今の日本では可能だ。

東京方面から八ヶ岳、信州の高原を訪れる中流層が三三五五、こうしたプチミュージアム、クラフト工房を訪れて、何がしかのお金をおとし、彼らの生活を支えている。

都会の人々がこうしたプチ・ミュージアム、クラフト工房、レストランを訪れるのはそこが気持ちのいい空間だからだ。センスのある空間、魅力あるライフスタイルを提案、情報発信していないことには人はあつまらない。

九割中流層がつくる、そこそこ美しい空間、センスあるまち

こうして八ヶ岳山ろく、信州の高原にはそこそこセンスのいい空間、魅力あるまちがつけられていく。

ヨーロッパの王侯、貴族や中国の皇帝がつけてつったような、超リッチな、どこかイスケールの文化施設、空間はつくれないかもしれないけれど、日本文明がうみ出した九割中流層が、そこそこの美的センスをもって、そこそこのお金をおとし、そこそこの美しい空間をつくる。

プチブルがつくる、プチミューゼ、プチクラブ

ト工房、プチレストラン……それはそれで一つの生き方ではないか。大衆民主主義社会における、そこそこセンスのいい生き方、そこそこのセンスが感じられる文化。

オルテガ「大衆の反逆」に対する日本なりのブレイクスルー?

かつてスペインの哲学者オルテガは「大衆の反逆」の中で大衆民主主義の危険性を指摘したが、もしかすると、日本はオルテガの心配を日本なりのやり方でブレイクスルーしつつあるのかもしれない。

日本のゆたかさの歴史と展望

そして、そうした「九割中流の国・日本」の礎をきざしてくれたのが、明治以降の日本の先輩たちだろう。

その一つの例が日本全国からあつまった工女たちだ。野麦峠をこえ岡谷の製糸工場で働き、家に仕送りをし、日本の工業資本の蓄積に貢献した一九一〇年代、一九二〇年代の工女たち。一九二〇年に一五歳だとすると（工女の大半は一五〜二〇歳の年齢だった）一九九七年の今は一〇二歳。ぎんさん・ぎんさん「の世代の貢献が現在のゆたかな日本につながっている。日本のゆたかさの歴史と展望を考えさせられた岡谷と八ヶ岳への旅だった。

（本稿にて、完）

シンボル 港町の灯台

「まなぼつと幣舞」

～釧路市生涯学習センター～



放浪の詩人と呼ばれた石川啄木は、新聞記者として七六日間を釧路で過ごした。そして、この街に多くの歌を残している。

その歌碑が多く見られる釧路市は、北海道を代表する港町の一つである。また国立公園に指定され、ラムサール条約登録湿地である釧路湿原とその中を流れる釧路川が雄大な広がりを見せている。釧路市内には旧釧路川が流れ、そこに架かる幣舞橋が夕陽や霧をバックに幻想的な街の雰囲気をつくりだしている。

その幣舞橋にほど近い高台に釧路市生涯学習センターはある。釧路市生涯学習推進部運営の

市民学園講座

市民学園講座と呼ばれる講座では、実際どういうものが行われているのか。今年は年間一六〇種類もの講座が組まれているという位、講座内容は多岐にわたっている。料理や絵画、手芸といった趣味的な講座をはじめ、釧路ではなかなか見ることができない能、歌舞伎、オペラなどをハイビジョンシアターで、講師の解説付で鑑賞したり、英会話や国際協力事業団と提携して国際交流の場を持つといった教養を高める講座、さらには高齢者教室などがある。

釧路の恵まれた自然環境を大いに利用したネイチャーアートや植物観察、カヌー体験などが

もと、平成四年にオープンした。愛称は「まなぼつと幣舞」。これには「学ぶ場所＝学ぶスポット」というところから、何か学んでみようと思ったら、誰でも気軽に立ち寄れる場所という意味が込められている。

施設内容は、八〇六人収容の大ホール、各種スタジオ、アートギャラリー、ハイビジョンシアター、多目的ホール、会議室、学習室、茶室などがある。八階まで吹き抜けの二階アトリウムは市民自由広場として、誰でも自由に利用できるよう開放されている。その他喫茶コーナー、情報コーナーなどがある。また九階は眺望のきくレストラン、一〇階は展望室となっている。

ある。また川（釧路川）がまちの中で文化的にどんな役割を果たしてきたかを学習する講座、新しく釧路へ転入してきた人に街のあらましを紹介する講座もあり、地域について深く理解することもできるようになっている。

このような多種多様な講座も、夜一〇時まで開館しているの、日中は仕事で趣味的なものも、あるいは学習時間がとれない人でも、仕事の後にじっくりと取り組むことができるよう配慮されている。そのほか、興味はあるが実際体験してみないとわからないという人のために、幅広いジャンルの短期体験講座も用意してある。

灯台的な役割

生涯学習センターの建物は港町釧路を象徴して灯台のイメージでつくられているが、市民や地域とのかかわりの中で目指す生涯学習の本当の意味での灯台的役割とは何かを問いかけていて示唆深い。

理想的なのは行政が何もしなくても、学習したいと思った時に生涯学習センターに行けば実現するんだと、市民がそう理解してくれることである。とはいっても、学習を始める際にその取っかかりがつかめない人もいるし、仲間がいても、どう活動していいのかわからない、そんな人のためにも学習相談や情報の提供、活動の場を提供している。

それはつまり、「市民の生涯学習に対する道標」として、普段の生活における案内役となることである。市民学園講座や、そこでできたサークルの活動などのコミュニケーションを通して、個人の資質や教養が高まり、潤いのある生活へつながる。それが生涯学習社会に向けての灯台的役割ということになるのでは。と、専門員の中塚氏は言う。

「生涯学習都市宣言」

さらに、釧路市が目指す生涯学習とは何か、ということ、市民自らの発想と自らの行動で「生涯学習都市宣言」を平成五年に採択している。これはあくまで、市民レベルの生涯学習市民会議で宣言文をつくり、市民の集いのもと大

会を開き、発表したものである。

地域活性化の基地として

釧路市でも都心部の空洞化という問題を抱えている。中心となる商店街に人が集まらない。釧路市には街のシンボルである幣舞橋の近くに、

グルメ・ショッピング・レジヤを中心とする都市型観光施設「釧路フィッシュヤーマンズワーフ」や「道立釧路芸術館」そしてこの「釧路市生涯学習センター」などがある。そういう場所を大いに利用し、帰りには都心部で買い物をしてもらう。そういう人の流れをつくりたいが、現在のところあまり実現されていない。人を集め、活性化を図るためにこれからどうすればよいか。館長の渡部氏はこう言う。「今までは市内の施設それぞれが単独の動きをしていたといえ



釧路湿原の植物観察講座



釧路川でのカヌー体験講座

る。これからは、施設は全て市民の財産であるという考えを持ちながら、遊んでいる施設がないよう、そして市民が有効に使い切れる場所づくりをする。こういう動きの中から、市民や地域の活性化が生まれ、広い意味での生涯学習の姿が見えてくるのでは。と。

釧路市民への情報の発信・受信の基地となっている生涯学習センター。高齢化・国際化・情報化が進む社会において、生涯学習への実践はますます重要なものになってくるだろう。だが、その基本は、利用者の「来てよかった」「何か得をした」「また来よう」という気持ちを大事にすることだろう。そういう雰囲気づくりが保ち続けられるよう、今後も期待していきたい。

(構成・磯林久仁子)

「ホンモノづくり」への挑戦 機関車村長につづけ！

宮崎県・南郷村

田原 正人 村長に聞く

平成10年 8月18日に



百済の館

宮崎市から車で約二時間半の山間に、南郷村はある。昭和六一年頃、一村一品運動が流行った頃からの村人の口癖は、「南郷村だけなんにもない。」であったという。しかし、田原村長には、胸に秘めた思いがあった。

「うちには百済関係の歴史伝説が眠っているじゃないか。そして、それを韓国との国際交流につないで、その跳ね返りとして村の振興に役立てられないだろうか。」

村に受け継がれる「師走まつり」は、村の祭りの中で最も百済の風習を色濃く残し、別れ別れに漂着した百済王親子が、年に一度再会するという悲しい伝説を再現したものだ。

村に誇りを持つて欲しいと考えていた田原村長は、就任してからすぐに、伝説を生かした村おこし「百済の里づくり」に取りかかった。

国際交流で村づくり

まず韓国や百済のことを知らなくてはならないということ、何度か調査団を派遣するうちに、韓国のほうでもその熱心さに興味を引かれ、交流が始まった。交流のシンボルとして、平成元年に『百済の館』が作られた。韓国から職人を呼び極彩色に丹青をほどこし、瓦も取り寄せ、本物にこだわった。平成二年には、韓国の青少年連盟から中学生をホームステイさせたいと申し出があり、中学生を持つ家庭に、引き受けてもらうことになった。

「韓国は儒教の国ですから、子供たちも非常に礼儀正しくて、受け入れた家庭はとても感心していました。いい意味での、カルチャーショックですね。その頃が、韓国と交流する原点になったと思っています。」

韓国との交流は、ハングル講座を開いたり、地元の主婦たちがキムチ作り挑戦するといった、草の根的活動が大きい。

また、公共施設に韓国の瓦を使用する、案内板はハングル併記にする等の、国際交流を念頭に置いた村づくりも行われているほか、役場の職員が、韓国から指導者を招き、民族舞踊(サムルノリ)を教わったりもしている。そのほか、村内の中学校と扶余(百済の都)の中学校が姉妹校になるなど、子どもの頃から韓国に親しみ

をもてる環境にあるのも特徴だ。
 こういったことから、一緒になって村おこしをやるとういう機運が出来たこと、これが一番大きな変化であった。

本物づくり『西の正倉院』

昭和六一年に来た文化庁の調査団により、南郷村の宝物の中に正倉院にある瑞花六花鏡と同型のものや、三角縁神獸鏡も含まれることを知り、保管に適した建物の必要性を感じていた。
 「正倉院と同じものを持っているのが宮崎県で南郷村だけなら、正倉院をそのまま復元して、そこに入れたらどうか。」

正倉院の校倉造りが、韓国の技法だということもあった。だが、実際に正倉院と同じものをつくるというのは、並大抵のことではなかった。国立文化財研究所の学術・技術支援や、宮内庁にある実測図をどう提供してもらうか。課題は、山積みだった。しかし、本物をつくりたい村長の熱意と、職員の根気強い努力の甲斐あって、平成八年に完成した。現在、内部は南郷村の文化財の展示や、祭りなどの文化の解説などに使われ、敷地内ではコンサートも催されている。

新たな活力を求めて

南郷村では、村の特産品や名物の実演販売を



西の正倉院の内部

行っている百済小路や南郷茶屋のほか、民芸品を扱っている『ふるさと民芸の家』がある。こは、支配人を全国から公募したユニークな組織である。現在の支配人は、東急観光で販売促進部長をしていた。そのほか、この公募の中から課長や係長が選ばれ、残りの職員はUターン組などで構成されている。

「みなさん本当に熱心です。お金にはかえられん、そういった生きがいを見つけようとする方がおられる。そういうふうによその人が入ってくると、まちは活性化されますね。」

また、新たな活動が始まった。今年の九月三日に温泉銭湯がオープンしたのだ。お盆の期間だけ仮オープンしたところ、一日に千人以上きた日もあるほどの好評だった。泉質はナトリウムが主成分で、慢性の胃腸病などにいいと衛生研究所の鑑定書が出ている。村ではこれを健康飲料温泉として売る手続きもとっている。

ひとつのレールは引かれた

村長が一番の目的にしているのは、観光開発と産業の振興がいかにつながるかであり、最後にもう一つ考えていることがうまくいけば、計画は一応完成するのだという。

「トップは機関車にならなくてははいけない。」
 村おこしを進めてきた村長のリーダーシップは、まさに「機関車」であった。しかし、それだけでは村民の理解は得られなかっただろう。それについてくるような職員・スタッフが必要だ。南郷村役場には、『文珠』という三二歳までの若い職員中心のグループがある。それは村長が相談する機関で、村長にいろいろ進言する機関でもあるという。文珠の知恵の『文珠』であり、若い者の知恵を借りるといのが基本にある。この風通しの良さが、活気につながる。

「このインターネットの時代には、もう若い人に切り替えなきゃだめだ。一つのレールは引かれたのだから、あとは若いのにやってもらいたいと思っています。」

この数年間で、Uターン・Iターンは百人以上を数える。「本物づくり」が認められてきたというところだろう。また、この活動は村長に自信を与え、そして、新たな人材を生み出す豊かな土壌をも育んでいる。

(構成・鈴木久美子)

水と緑・文化都市へステップ さらなる「住みやすさ」を求めて



武蔵野の面影を今に残す東京都小平市。都心から西へ約二五キロ、多摩地区の東北部に位置する。東に田無市、北に東久留米市、東村山市、東大和市、そして南には立川市、国分寺市、小金井市とそれぞれ隣接しており、人口は約一七万人。

明治二二年に七つの村の合併により小平村が誕生した。小平という名前の由来は、最初に開拓されたのが小川村であったことと一帯が平たんな土地であったところから名づけられたという。

「むさしのは月の入るべき峰もなし
尾花が末にかかる白雲」(大納言通方)

昭和一九年に町制施行、そして昭和三七年に市制が施行された。全国で五五八番目、東京では一一番目であった。(現在東京には二三区、二七市、五町、八村がある。)

市内には「ケヤキ」、「カシ」、「シイ」などが大きく枝を伸ばしており、その緑豊かな風景は人々の心に安らぎを与えている。現在一、五六九本が小平市に保存樹木として登録されている。

「女郎花匂へる秋の武蔵野は
常よりもなほむつまじきかな」(紀貫之)

小平市の特産物といえは「うど」が有名であるが、最近では梨、ぶどう、栗などの観光農園

東京(区市町村別)人口一覧 平成9年3月31日現在

区市町村名	人口(人)	区市町村名	人口(人)	区市町村名	人口(人)	区市町村名	人口(人)
千代田区	39,964	北区	323,348	小金井市	106,140	羽村市	54,654
中央区	71,806	荒川区	170,085	小平市	167,185	あきる野市	76,496
港区	152,073	板橋区	495,028	日野市	161,807	瑞穂町	32,674
新宿区	261,425	練馬区	630,758	東村山市	135,059	日の出町	16,569
文京区	164,803	足立区	619,200	国分寺市	103,041	檜原村	3,586
台東区	152,988	葛飾区	420,273	国立市	66,651	奥多摩町	8,296
墨田区	214,760	江戸川区	593,587	田無市	75,511	大島町	9,663
江東区	360,802	八王子市	492,473	保谷市	97,926	利島村	298
品川区	315,094	立川市	157,507	福生市	60,140	新島村	3,191
目黒区	236,494	武蔵野市	129,813	狛江市	72,423	神津島村	2,312
大田区	635,327	三鷹市	160,190	東大和市	76,744	三宅村	3,875
世田谷区	765,403	青梅市	136,303	清瀬市	66,885	御蔵島村	254
渋谷区	182,197	府中市	213,253	東久留米市	112,078	八丈町	9,391
中野区	293,260	昭島市	106,132	武蔵村山市	66,314	青ヶ島村	212
杉並区	499,439	調布市	192,580	多摩市	142,841	小笠原村	2,240
豊島区	232,209	町田市	358,766	稲城市	63,137		
小計	4,578,044	小計	5,199,296	小計	1,573,880	小計	223,711
						合計	11,574,931人

も盛んになっている。そんな小平市は「まちづくり」の基本として「ひと・文化・健康・環境・安全」という五つの視点から取り組んでいる。緑あふれるまちであって、なおかつ文化都市である小平。今回は小平の過去と現在そして未来にスポットをあててみたいと思う。

先人たちの「土地開発」で夜が明けた

今から約三万年前の旧石器時代にこの小平の地に人が住んでいたことは明治四九年に発見さ

れた鈴木遺跡などから明らかになっている。

石神井川の源流が当時はこのあたりにあったと思われ、この源流周辺に広がる遺跡から多くの石器や礫が出土している。しかし時の移り変わりとともに石神井川の源流が下流へ移っていったらしく、縄文時代になってからは人々の居住は見られなくなった。その後、奈良・平安時代の竪穴式住居が小平市立第八小学校で見つかった以外、水の乏しい小平の地には人々が住んでいた痕跡は見られない。

鎌倉時代になって幕府が道路を通し（鎌倉街道）、道沿いに井戸が掘られたりしたが、集落が営まれることはなかった。

「武蔵野といづこを指して分け入らむ
行くも帰るも果てしなれば」（北条氏康）

転機が訪れたのは江戸時代。人々が江戸に集まり始めてからである。徳川幕府は人々の飲み水を確保するために多摩川の水を羽村から四谷まで導水することを計画。玉川兄弟が失敗を繰り返しながらも七ヶ月という期間で完成させたのが玉川上水である。一六五四年のことである。長さは四三キロに及んだ。兄弟は夜、近い所には線香を、遠い所には提灯を数十人の人夫に持たせ、一定間隔で立たせて地面の起伏を測った。この測量方法は戦国時代に忍者が敵国の地形を測るのに用いた技術だという。四谷から大木戸まで石をくり抜いた石管や木を組み合わせて



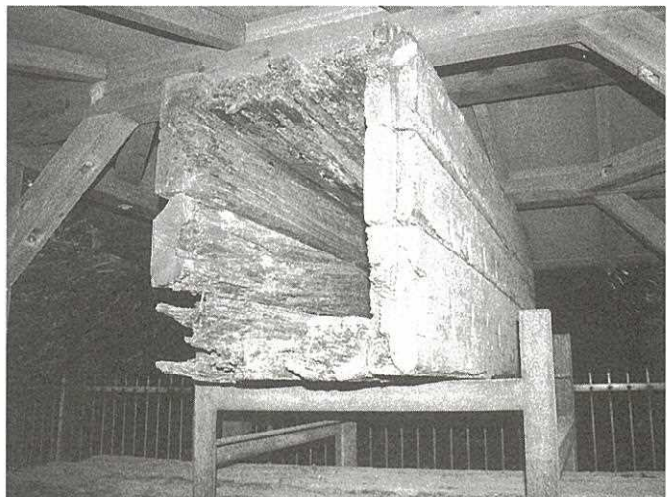
小平市八小遺跡（昭和44年に発見された）

作った配水管を土に埋めて水を通した。

この玉川上水から分水して用水を引くことにより小平の地によりやく夜明けがやってきた。新田の開発が始まったのである。七つの村が次々に開墾され、一六五六年頃には今の小平を構成する基礎ができあがった。

村から都市へ 住宅建設が起爆剤に

小平村が町になったときの人口は約一万六〇〇〇人。昭和一九年当時である。



麴町三丁目から出土した木管（千代田区清水谷公園）

第二次大戦後日本は住宅難で困っていた。東京都はそんな中、多数の都営住宅を小平に建設した。また同時に企業の工場も誘致されたりしたので人口は急激に増加していった。昭和三五年には五万三〇〇〇人。法で定められた市としての条件が整ったのを機に昭和三七年市制を施行した。そのとき人口は約七万人であった。

学園都市、文化都市へ

大正末期、小平に学園都市をつくる構想が持

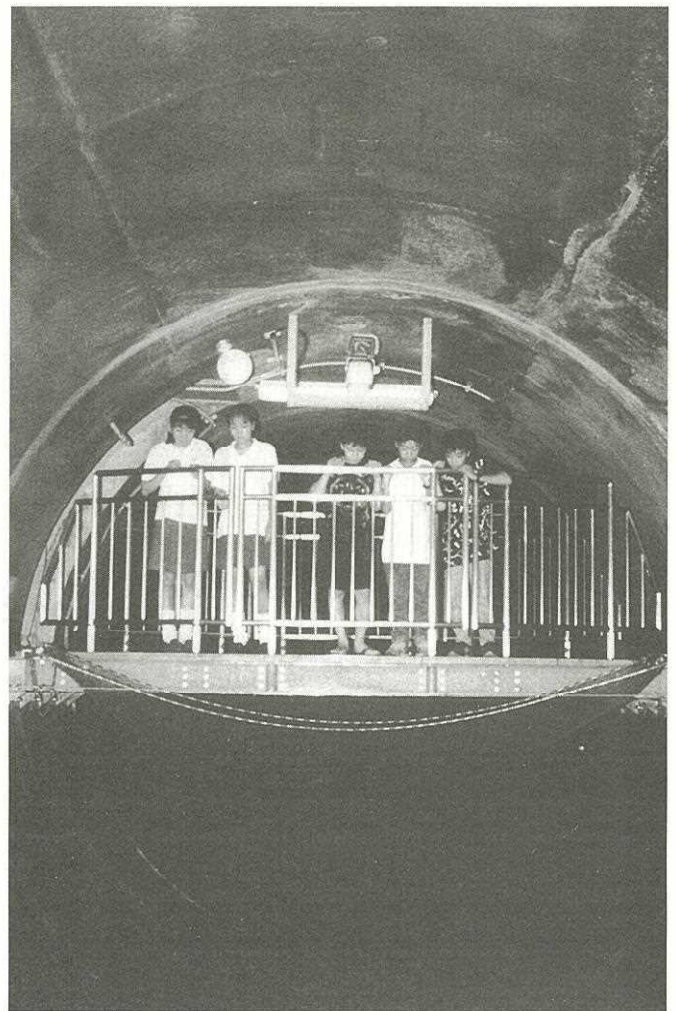
ち上がった。この構想により、昭和六年に女子英学塾（現津田塾大学）、昭和八年には東京商科大学子科（現一橋大学）がそれぞれ開校した。

この学園都市構想はその後さらに発展し、昭和三二年に白梅学園短期大学、昭和三六年に武蔵野美術大学、昭和五七年に嘉悦女子短期大学そして昭和六〇年に文化女子大学小平校舎がそれぞれ開校した。現在、学生総数約一万五〇〇〇人が小平で学んでいる。

このように学園都市に育つ一方、多摩北部の六市（小平市、東村山市、田無市、保谷市、清瀬市及び東久留米市）は人々が生涯にわたって学習できる施設として多摩六都科学館を建設した。この建物は田無市に建設され平成六年にオープンした。日本の将来を背負っていく子供たちや青年、社会人にも身近に科学技術を学んでもらおうと建設されたもので、世界でも最大級のプラネタリウムやパソコン教室、科学教室などの設備が整っている。ここでは生命科学から地球や宇宙の科学、そして日常生活にかかわる科学や地域の自然科学を学ぶことができる。来館者は子供に限らず一般の人も多数訪れており、年齢を超えた「生涯学習施設」として利用されている。

下水道事業が市民生活に直結した

小平市のおこなった下水道整備事業は昭和四



小平市 ふれあい下水道館 地下5階
下水道見学ステージ（小川幹線）

年から始まり、事業着手後二〇年を経て平成三年三月に下水道汚水普及一〇〇%となった。

市は水の大切さを市民に身近に感じてもらうことを目的に「体験できる下水道館」づくりを計画。これは下水道汚水普及一〇〇%達成記念事業の一環でもあった。

「ふれあい下水道館」と名づけられたこの建物には全国にさががけて「じかに下水道館の中に入って下水道の実態に触れる体験場所」が地下二五メートルの所に設置されている。またこの会館には下水道の歴史をわかりやすく解説した

展示室や、水を顕微鏡で観察したり理科の実験をしたりできる講座室等がある。市内の小中学生が教育の一環として利用しているほか、一般市民も家族連れで訪れるという。

さらに住みよい小平へ

小平市は「ひと・文化・健康・環境・安全」の五つの視点からまちづくりを進めてきた。その基盤となっているのが「緑と活力のあるふれあいのまち」である。

公園・緑地の整備が手がけられてスポーツ・レクリエーションの場所、防災避難の場所そして憩いの場所として施設の充実がはかられてきた。

武蔵野の面影を残すナラ、クスギなどの雑木林の保存とあわせて、特色のある公園が市内に数多く存在しており、現在約二三ハケ所の公園・広場が市民に利用されている。

また前述した玉川上水は昭和四〇年に新宿副都心計画による淀橋浄水場の廃止により通水が途絶えたが、自然景観を守ろうと遊歩道がつくられたのを機に水路の護岸工事や放流処理水の砂濾過装置などの工事がおこなわれ、昭和六一年に清流が復活した。今ではこの上水緑道、野火止用水緑道、狭山・境緑道、小金井公園を結ぶ延長二キロメートルが小平市の周囲を一巡りする「グリーンロード」として整備され、平成十年四月にはグリーンロード推進協議会が設立された。四月には市内一周緑道歩こう会などのイベントも催されたという。

そして近年全国的な問題となっているゴミ処理・リサイクル運動に関しては市も市民・商店街と協力して解決する策を見いだそうとしている。平成二年には市は市内のスーパーマーケット・商店・事業所に対してゴミの減量、資源の再利用をよびかけると同時に、資源回収協力店を募集することにした。これは行政と住民、企業が一体となってゴミの減量化、リサイクルを

進めようという試みであった。その結果、資源ゴミの回収量は初年度（昭和五三年度）一四五トンであったのに対し、平成八年度には一万四七三トンにまで回収量を増やしている。実に七二倍の回収量である。このように資源の回収に力をいれるとともに生ゴミについては堆肥として利用する計画もあるという。

足元を大切にしておいて未来をとらえる

行政の活動方針が着実に成果をあげたことはいうまでもないが、市民の活動も忘れることはできない。「小平市玉川上水を守る会」は昭和四



玉川上水（西武国分寺線鷹の台駅付近）

七年に結成された。この会が水流復活に努力した功績は大きい。玉川上水の歴史や自然の調査を記録するなど、野草の観察をしたり活発に活動している。写真集「玉川上水の野草」を発売しているほか、最近では上水沿いの樹木の保存や水質の改善にも取り組んでいるという。

また「小平ホテル会」は昭和六〇年に結成されたものであるが、当時ヘイケホテルが生息する玉川上水が清流復活工事後みられなくなったのを憂いて地元の有志が発足したものである。市内ではたるとの養殖を始めたのをきっかけに市もほたる飼育場をつくってほたる復活に力を注いでいる。毎年六月に小平ふるさと村で「ほたるの夕べ」が催されており、市民に喜ばれている。

☆ ☆ ☆

以上、小平の歴史を踏まえながら文化、都市の近代化をみてきた。地道ではあるが着実なまちづくりを目指してきた小平市、道路の拡幅問題や交通渋滞の解消問題など課題はまだ残っているが、これからは「さらに住みよいまち」へ向かって発展していくことを期待したい。

（文責 飛松尚孝）

参考文献

増補 玉川上水 アサヒタウンズ編
けやき出版

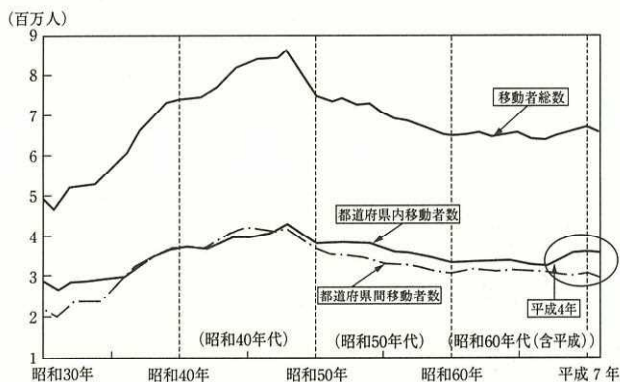
小平市三〇年史

郷土こいだいら

～次世代に向けて～

戦後の人口移動と近年の新しい動き

図表 戦後の人口移動
(移動者総数及び都道府県内・都道府県間移動者数)



注) 昭和47年までは、沖縄県の移動者数を含まず。
出典) 総務庁統計局「住民基本台帳人口移動報告年報」より。

今から十年ほど前、東京一極集中が進行した時期には、地方経済は東京への依存を深めていったが、バブル経済が崩壊してしばらくたった現在、これまでとは異なった、身近な範囲での経済活動を指向する地域循環型の経済が定着しつつあるのではないだろうか。この点を考えるため、まず戦後の我が国の人口移動の推移(図表)を見ると、高度成長期の昭和四〇年代末までは都道府県間移動を伴う大規模な人口の移動が見られたが、石油ショック後の安定成長期に

入ると都道府県間移動を中心に徐々に移動は減少していった。そして、昭和六〇年のバブル経済の時期を迎え、人口移動は下げ止まる傾向が見られたものの、バブル崩壊後の平成四年から都道府県内移動が増加し、同時期に都道府県間移動が減少している傾向が見られる。ちょうどこの時期、高卒者の県内就職率や分譲住宅等の着工戸数が増加しており、地元で就職し、地元で家を持つという地元指向の動きが起きていると考えられる。また、事業所統計によ

り事務所における従業者数の増加率を大都市圏と地方圏で比べると、バブル崩壊後(平成三年から八年の間)では地方圏の方が伸びが大きくなっている。さらに、地元を根ざした企業であると考えられる単独事務所(その場所以外に同一経営の本所・本社・本店や支所・支社・支店を持たない事務所)の従業者の寄与分に限ってみると、その差はよりはっきりする。

これらの点から、これまでの大都市指向から、地元に着しようとするライフスタイルが近年、根付きつつあるといえるのではないだろうか。その背景として、バブル経済の崩壊により、かえってこころの豊かさや自然、文化などを求める価値観が復権し始めたことがあるのではないだろうか。また、従来、地方が圧倒的に不利だった情報収集がインターネットの普及などにより克服されつつあり、地方においても充実した活動の機会が得られつつあること、また、逆に国際化・情報化の中で、企業を取り巻く環境の変化が著しく加速し、企業で働く人々が安定した帰属意識や充足感が得られなくなってきたことなどがあるのではないかと考えられる。

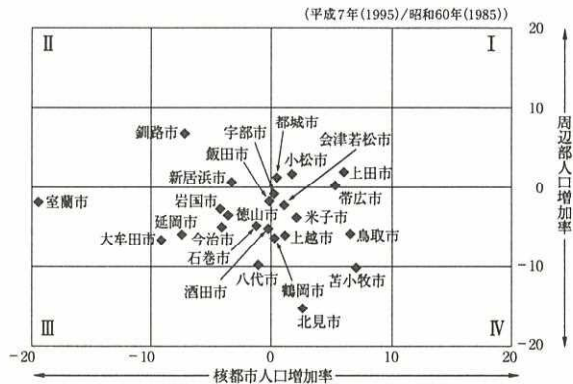
～次世代に向けて～

地域循環型の経済と都市圏の発展

地域循環型の経済を更に詳しく見るため、地方中小都市圏の成長とその要因を分析してみる。分析のため、生活や経済上一体をなしているいくつかの市町村を一体として一つの都市圏と考え、その中で中心的な役割を果たしている市を核都市、その周辺にある市町村を周辺部と呼ぶこととする。

平成七年の国勢調査で都市圏を設定した場合、都市圏全体の人口が30万人以下で核都市の人口が10万人以上のものが二四存在している。

図表 人口30万人以下(核都市人口10万人以上)の都市圏における核都市・周辺部の人口の増減率



注) 総務庁統計局「国勢調査報告」より建設省作成。

そして、これらの都市圏の人口が、核都市で伸びているのか周辺部で伸びているのかを基準に分類し、横軸に核都市の人口の伸び率を、縦軸に周辺部の人口の伸び率をとった座標平面上に置いてみる(図表)。

これより、昭和六〇年から平成七年にかけての人口の変化では、I、IV型の都市圏がそれぞれ複数存在しており、個々の都市圏で人口増減のパターンに違いがあることがわかる。ここにあげた都市圏について、過去に遡って、同様の方法で分類して整

理してみると、人口移動の激しかった昭和四〇年代ではI型が多かったが、昭和五〇年代ではI型へと傾向が転じ、さらに昭和六〇年代になるとI型からIV型までのバランスが見られる。これは、人口移動も増加も共に低下する中で、個別都市ごとの産業の盛衰や広域的な交通ネットワークの整備状況などの多様な諸要因が個別の都市圏の人口増減に影響したためと考えられる。

そのような諸要因の一つとして都市圏内の連携の密接さがあると思われる。核都市と周辺部の間で経済上あるいは日常生活上の適切な機能分担のもとに、お互いに相互補完しあうかたちの発展の可能性があるのではないだろうか。そのような都市圏では核都市と周辺部での交通量も大きくなるはずである。

道路交通センサスを用いて都市タイプ別の都市圏内の一人当たりトリップ数の大きさを比べてみると、I型の都市圏では一人当たりのトリップ数も多く、逆にIII型の都市圏では少なくなっている。このように、都市圏内の交通量の密接なところで発展が見られるという関係は、地域循環型の発展をしている都市圏があることを示唆しているのではないだろうか。

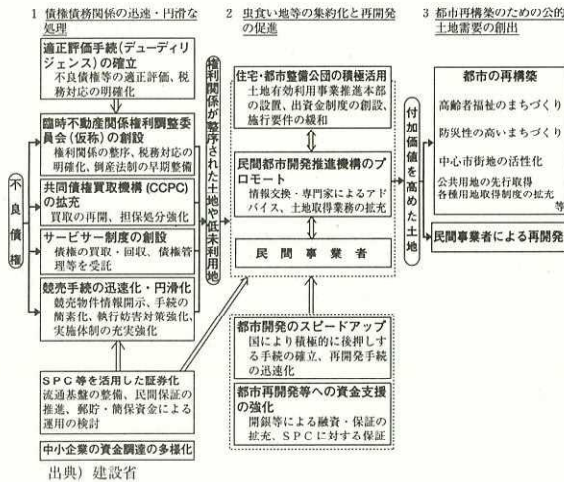
～次世代に向けて～

土地市場等の活性化

我が国の都市においては、虫食い地等の低未利用地の整形・集約化等とこれらを活用した再開発を促進することに、都市を魅力あるものに再構築していくことが重要かつ緊急な課題となっている。

このため、金融機関の不良債権の処理という財務上の対応にとどまらず、低未利用地を拘束している債権関係全体を整理し、これを的確に有効需要の創出に結びつけるための調整や支援の仕組みを整備する必要がある。

図表 土地・債権流動化トータルプラン



まちづくりの根本に関わってくる低未利用地の問題については、不良債権問題の解決が必要となる。このような大幅した債権関係の整理を前提に、虫食い地の整形・集約化を進め、これを活用して都市の再開発を促進する必要がある。このため、住宅・都市整備公団の改革の一部を、実質的に前倒しして実施し、再開発街づくりへの重点化(土地有効利用事業推進本部の設置、土地取得のための臨時出資金の措置等)を行うとともに、民間都市開発推進機構に都

市開発プロモート体制を構築し、債権関係の処理を行う臨時不動産関係権利調整委員会(仮称)と連携して、土地の有効活用のための情報交換、助言、関係機関との調整を行うこととしている。また、都市開発の迅速化、都市再開発等への資金面・信用面での支援等にも取り組むこととしている(図表)。

民間需要が低迷している状況であり、公的施設整備のための土地取得を図り、二十一世紀に向けてのまちづくりを積極的に推進する必要がある。こうした取組の結果、①高齢者・弱者にやさしいまちづくり(密集市街地の解消、グリーンオアシス事業等)、②都市再生(中心市街地の活性化、都市構造再編プログラムの推進、将来のまちづくりのための公共用地先行取得等)などの実現を図ることとしている。

なお、不動産等の証券化市場が整備されることにより、不動産等の評価や属性に係る情報の一層の客観化や公開が促進されれば、市場全体の透明性、利便性、信頼性が向上し、視野が広がり、市場機能が活性化することが期待される。また、今後様々な予想される不動産市場における需要的構造の変化に供給が的確にできるようにすることも考えられる。

～次世代に向けて～

国際化に対応した物流効率化

経済のグローバル化に伴い、金、モノ、情報などの国境を越えた世界規模での活動が活発化している。こうした状況を受けて、企業は自ら最適な活動環境を求めて立地する国を選ぶようになり、現代は国際的な大競争の時代に突入していると言える。

総合物流施策大綱

国際的な視点でみた場合、その国で提供される物流サービスの内容やコストの水準は産業立地競争力の重要な要素の一つとなっている。そのため、政府の経済構造改革の基本で

図表 国際空港・港湾と高速道路網とのアクセス状況(※)

	アメリカ 	ヨーロッパ (独、仏、英、伊) 	日本 
国際空港 	98% $\frac{94}{96}$	72% $\frac{79}{110}$	46% $\frac{12}{26}$
国際港湾 	93% $\frac{52}{56}$	93% $\frac{26}{28}$	33% $\frac{12}{36}$

※：高規格幹線道路等のインターチェンジなどから10分以内に到着可能な施設数/対象施設

注) 1：日本/平成8年度末、アメリカ/空港1995年、港湾1993年、ヨーロッパ/空港1995年、港湾1992年。
2：対象空港は、国際定期便が就航している空港。
3：対象港湾は、ヨーロッパについては総貨物取扱量が年間1,000万トン以上の港湾、アメリカ、日本については国際貨物取扱量が年間500万トン以上の港湾。

出典) 建設省

ある「経済構造の変革と創造のためのプログラム」が平成八年十二月に閣議決定され、その中で物流改革がエネルギーや情報通信と並んで最重要課題に位置づけられた。さらにこれを具体化するため、平成九年四月、総合物流施策大綱が閣議決定され、① アジア太平洋地域で最も利便性が高く、魅力的な物流サービスが提供されるようにすること

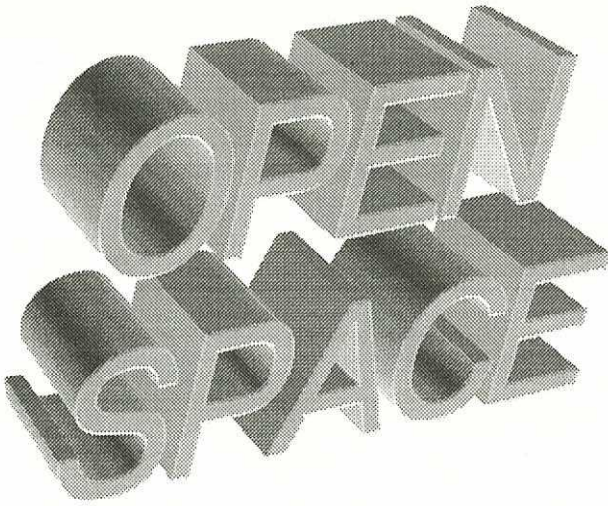
② このような物流サービスが、産業立地競争力の阻害要因とならない水準のコストで提供されるよう

にする。③ 物流に係るエネルギー問題、環境問題及び交通の安全等に対応していくこと

の三つの基本的目標をおおむね二〇〇一年までに達成するよう取り組むこととなった。これらの基本的目標を規制緩和や社会資本整備、技術開発などの多面的な改革により達成していくこととしているが、社会資本整備分野における最重要課題の一つとして、空港・港湾のアクセス道路や幹線ネットワークの整備があげられている。

空港・港湾のアクセス道路の整備

効率的な広域物流ネットワークを形成するためには、道路ネットワークを整備し、空港や港湾を整備すると同時に、これらの連絡を強化することが重要である。我が国の国際空港と高速道路網、あるいは国際港湾と高速道路網の連絡率は欧米諸国と比較して低く(図表)、今後ますます国際化する物流の円滑化を図る上で早急な整備が望まれる。新道路整備五箇年計画では、期間中の平成十四年度末までに国際空港とは七十三%、国際港湾とは五十三%の連絡率を目指して整備を進め、より長期的にはともに連絡率九割に高めることを目標としている。



ISOBUCHI TAKESHI

磯淵 猛

紅茶研究家「紅茶文化の会」主宰

ひと昔前、コーヒーを飲む男は格好よくて、紅茶を飲む男はひわて格好悪く見えた。仕事があまりなくても遅くまで残業し、いかにも忙しそうに立ち振る舞う。そんな中で飲むコーヒーは、立ったままだつたり、机に腰掛けてすぐに次の場所に行けるような姿勢でいる。そして、飲みかけのコーヒーは置きざりにするか、紙コップならポイと放り捨てて、足早やに立ち去る。行動派のいかにも仕事ができる男の姿であつた。

ところが近頃こんな男は嫌われる。だいたいあわただしく、余裕がない。こんなのは人や物にも優しくできないし落ち着きがない。飯にものごく忙しくて、そこまで走ってきていても、誰かがお茶を飲んでいたら、わざとゆつくり腰掛け、お茶をつき合い、ゆとりを見せる。そんなタイプの男が信頼され、好ましい時代になつた。時代が変わつたのである。飲みものと言えどもライトになり、刺激が少なく体にやさしくて、しかもダイエツト志向に向かつている。紅茶がまさにこの筆頭に挙げられ

紅茶でストレスを発散する方法

国別の特徴をつかみ、食材として見分ける

る飲物になつてきた。その証拠に、中・高・大学生、若いOLたちの主な飲みものは、缶紅茶、ペットボトルのアイスティーである。「紅茶なんかのんびり飲んでいられるか」

と腹では思つていても、おくびにも出さず、ここは紅茶の知識でも身に付けた方が将来のためですぞ。

インド紅茶とセイロン紅茶

紅茶もワインのように複雑で何百種類も売られているから、つい取っつきにくいと思つてしまつが、実は、元はと言えはほんの十に満たない種類なのだ。これを国別の特徴にして、しかも食材として考えればいとも簡単に見分けがつき、使いこなすことができる。その秘技とは次のようなものだ。

インドの紅茶

ダーズリン、アッサム、ニルギリと産地の名前が付いた紅茶が三種類、特徴は渋味が強く、個人的な香り、茶葉はどれもセンチほどの長さがあつて大きい。日本茶の個性で言うと煎茶みたくなもの、風味が強いからミルクティー

にしたり、好みに合わせて濃く、または薄くいれて、ブラックティーで味わうのもよし、である。ただし、レモンティーには不向き、まちがってもダーズリンやアツムにレモンを添えて、などと言っではいけない。

セイロンの紅茶

紅茶の産地は五カ所あって、ウバ、ヌワラエリア、デインブラ、キャンデイ、ルフナという。これらをひとまとめにしてセイロン茶と呼んだりしているが、この中でウバは有名で世界三大銘茶（ダーズリン、中国のキーマン茶のほか）の一つだ。全般にオーソドックスで飲みやすく、強い個性がない。アイスティーやフルーツを入れたバリエーションティー、スパイスやハーブにも可能だし、ブランドティーを少々入れたりする時だつていい。

ほとんどの紅茶は、このインドとセイロン茶を主にブレンドして作られている。だからこの産地の個性を知っていればどのようなブレンドでも風味の方向性はわかるというものだ。

おいしくいれる方法

まずは汲みたての新鮮な水をやかんで沸かす。この時に霧のように細かい泡がいつばいに立って、一センチほどの泡が五、六個浮いてきたら火を止める。温度はおそらく九三〜九五度Cくらいで激しく沸き立つ手前である。これでよい。沸かしすぎると酸素がなくなり茶葉がジャンピングという運動をしなくなる。

いい条件で沸かした熱湯を茶葉めがけてたたきつけるように注ぐと、茶葉は泡とともにすべて浮かび上がり、それからまるで雪が降るようにゆつくりと落ち、中にはまた上がるものもある。この上下運動をジャンピングといい、紅茶が最もおいしく抽出される時の茶葉の動きだ。

英国式ミルクティーの作法

たいていのお茶会で出されるのがイングリッシュミルクティーで



ある。茶葉はインド系のもので、つまり渋めにはいるということだ。ミルクはカップに先に入れても後から入れてもいいが、ミルクの質にはとてもこだわらる。必ず低温殺菌、しかも常温もしくは冷たいのを使用する。そのため紅茶がぬるくならないよう前もってカップをうんと温めておく。そして冷たいミルクを入れ、熱い紅茶を九分目まで注ぐ。品が悪いがこうすると熱いミルクティーを飲むことができる。これがイギリス人が考えた絶品のミルクティーなのだ。

フレイバーティーの飲み方

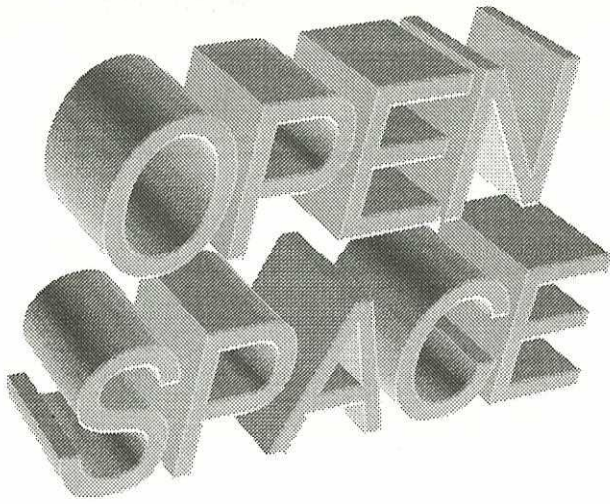
ピーチ、リンゴ、バナナなど香りが付いた紅茶で日本でもいっぱい出回っているから御存知だと思ふ。ところが飲み方がわかっていない。普通の紅茶のように、人数分グラス一杯の茶を入れたりすると、まるで薬みたいな強烈な臭い

になり、人によってはもう二度と飲みたくなくなってしまうこともある。

まずどんな時に飲むか、それは会議や仕事でめちやめちや疲れた後だ。時間帯としては午後の四時から六時だろうか、気分が減ったり不愉快な時、このままではデートもできず、家に帰っても夫婦げんかも起こしかねないような時に、薄くいれたこれを飲む。すると気分がほぐれ、微笑みたくなるのだ。ヨーロッパなどではこんな紅茶がない時は、花屋や果物屋に寄ってバラを一輪買ったたり、リンゴ一個を買ったりする。つまり香りの店で気分を和らげるのに利用するのだ。

大切なのはあくまでも香りが重点で、味を強くしないこと。ティースプーン一杯の茶葉でティーツップ四、五杯分を作るのが適量である。

恋人やかみさん、上司が険悪な顔をしていたらピーチティーでも出してみよう。絶対に、いや、きつと優しいムードになることを保証いたします。



OOTSUKI YOSHIHIKO

大槻 義彦

早稲田大学理工学部主任教授

「その筋の人々」から、私は「科学バカ」と呼ばれている。いわく、「大槻は科学で何てもわかったと思っている」「科学ではわからないこと、つまり不思議なこと、神秘体験が山ほどあるのに、大槻は認めない」「超能力は、大槻の知らない世界だ」などなど。

そこで私はいつも、懇切丁寧に説いてまわる。だれも科学者は、「科学で何てもわかった」なんて言っただけよ。科学の分野で、わからないことが山ほどあるからこそ、科学者は、研究を続けているんです、と。

物理学の分野でも、世界の先進国で、理学博士（ドクター・オブ・フィロソフィー ph. D）を取得する若い人は、年間およそ数千人にのぼる。さらに、全世界で、新しい発見や理論が学術専門誌に発表される論文数は、数万に達する。

これらは、物理学上でわからないことがあるからこそ、その解明に努力し、その成果として発表されるものである。物理学という分野ですら、ことほど左様に、わからないことが多いのだ。

不思議、神秘、科学

化学、生物学、地球・天体物理学など、他の科学の分野を加えれば、科学の分野で、わからないことだらけなのである。だからこそ科学者という職業がなり立っているとさえ言える。

だから、私を含めて、およそ科学者たる者、ただの一度も「科学ですべてわかった」などというはずもないし、事実、言っていない。

しかし、だからと言って、「その筋の人々」が言うような、「超能力」「霊能力」「神秘現象」「超常現象」が、科学で解明されていない、自然現象であると、かたんに結論することはできない。

超常現象のうち、「超能力者」「霊能力者」「気功師」など、「特殊な人間」が関与していない突発的な自然現象のうち、未解明なものは、たしかにある。

「火の玉」「UFO」（ただし宇宙人とは無関係！）「竜巻き」「ダウン・バースト」「地震」などなど。物理学者は、「その筋の人々」に勧められなくても、とつこの昔からこれらの現象は研究を続けている。そしてついぶん解明が進んでいる。

エッセイ

居候ねこ

今村 葦子
(作家)

「子どもは、環境に育てられるんだ」

ことあるごとに、それをもちだすのは、友人の息子。なまいきざかりで親を困らせています。その男の子が、近頃、ぴたりとそれを言わなくなりました。どうやら、「居候ねこ」のせいらしい、と友人は言います。ペット禁止のアパートに住む友人は、拾ったのらねこを飼うことができずに、やむなく、居候ねこということにしてある、と言って笑います。ところが、思いがけないことに、情動不安定ぎみだった男の子が、しきりにねこの世話をやき、今ではすっかり落ちついてきた、と友人は言います。私は「居候ねこの幸運を祈る」と言いかけて、ふっと思いとどまりました。何かものすごく「はかない物語」を聞いたような気がしたのです。

居候ねこは、男の子に、いったい何を語りかけたのでしょうか？ 居候ねこの存在も切実なら、そこに生まれるいつくしみも切実、そして何よりも、男の子の横顔が、ドラマチックなほど、やさしく変化しているのを、私は、しげしげと眺めました。

はたして居候なのは、ねこだけでしょうか？ 私たちのすべてが、すぎゆく時のなかでは、ひとしく居候なのではないのでしょうか？ 子どものみならず私たちのすべてが、環境に育てられているのではないのでしょうか？ はかないはずの居候ねこは、ニャンとも答えず、男の子のひざの上に、まるくなつてねむっています。

しかし、問題なのは、「その筋の人々」が言うところの「超能力」「霊能力」である。見つめただけでスプーンを曲げたり、指で文字を読んだり……。あげくのはてには、「あの世の人」を呼び出し話をしたリ……。

科学者が否定するのはこれらの、「人が関与して起こる超能力、霊能力」なのだ。こんな現象は、未知の現象でも何でもない。物理

学の基本原理、基本法則から考えて、こんな現象は決して存在しないことが証明済みだからだ。

科学や物理学にわからないことは山ほどあると述べた。しかし、数百年の科学の歴史の中で、すでにわかっていることもあるのだ。

いや、「わかりきったこと」があるのである。「エネルギー保存法則」「作用・反作用の法則」「エントロピー増大の法則」などなど。だから

からこそ、これらを用いてハイテクが、正確に安全に作動する製品を作り出しているわけだ。

これらの、すでにわかっている法則から考えて、「超能力」や「霊能力」はないということがわかる。だから、未知の現象を追い求める

科学者は、「超能力」などトリックと断定し、だれひとりとして研究对象にしない。「その筋の人々」よ。あなたたち

が信奉する超能力は自然現象、物理現象というのですか。もしそれが本当に自然現象なら、それは専門の科学者にまかせれば良い。

最先端の科学者だけが、科学的現象のうちどこまでわかっている、どこからわかっていないかを知っているのだから。しかも、それを充分に知ることが、真の科学者の条件なのだから。

財団法人 全国建設研修センター

新しい国づくりと 人材育成

主な業務

- ◆国、地方公共団体、公団、公社、民間の職員研修
- ◆建設業法にもとづく土木工事、管工事、造園工事の技術検定および土地区画整理法にもとづく技術検定
- ◆国際協力研修及び国際交流
- ◆建設研修及び建設技術等の調査研究
- ◆建設工事の施工技術に関する調査
- ◆民間測量技術者の養成



【本部事務所】 東京都小平市喜平町2-1-2

☎042(321)1634

【東京事務所】 東京都千代田区永田町1-11-32

☎03(3581)6111

出版案内

■ 建築設備設計基準・同要領

平成10年版 定価12,600円

■ 建築設備設計計算書作成の手引

平成6年版 定価 3,570円

■ 建築設備計画基準・同要領

平成8年版 定価 5,300円

■ 建築設備設計計算書書式集

平成6年版 定価 3,262円

■ 排水再利用・雨水利用システム 計画基準・同解説

平成9年版 定価 7,350円

■ 下水道維持管理の手引

定価 5,403円

■ 下水道事業の手引

平成10年版 定価 5,565円

■ 下水道計画の手引

平成9年版 定価 5,775円

■ 用地取得と補償 新訂2版

定価 5,880円

■ 改良復旧事業の手引

平成7年版 定価 4,587円

■ 技術革新と国土建設

谷藤正三著 定価 6,321円

☐各図書の定価は税込みとなっております。

☐送料は実費です。

☐購入ご希望の方は、書名と部数をご記入の上、現金書留で下記あてにお申込み下さい。

企画から調査・設計・施工・管理・監督・検査まで
一貫した建設専門技術教育

建設大臣指定校 **国土建設学院** 学院長 上條 勝也

〒187-0044 東京都小平市喜平町2-1-1 TEL.042-321-6909

- 地図デザイン科(1年) ● 都市工学科(2年) ■ 設備工学科(2年)
- 測量科(1年) ● 土木工学科(2年) ■ 造園緑地工学科(2年)
- 測量工学科(2年) ■ 水工土木工学科(2年) ● 印科は卒業時測量士補無試験取得
(実務2年で測量士無試験取得)
- 測量土木技術科(2年) ◆ 土木地質工学科(2年) ● 印科は実務2年で地質調査技士取得

建設大臣指定校 **九州理工学院** 学院長 原田 美道

〒889-1702 宮崎県宮崎郡田野町桜ヶ丘乙1730-2 TEL.0985-86-2000

- 環境土木工学科(2年) 1・2級土木施工管理技士(受験資格実務2～5年)
測量士・測量士補(在学中に受験)

- 建築環境工学科(2年) 建築コース
1級建築士(受験資格実務4年) 1・2級建築施工管理技士(受験資格実務2～5年)
2級建築士・木造建築士(受験資格卒業時取得)
- 建築環境工学科(2年) 設備コース
1・2級管工事施工管理技士(受験資格実務2～5年) 設備士(受験資格実務4年)
建築設備士(受験資格設備士合格後3年)

- 環境景観学科(2年) 1・2級造園施工管理技士(受験資格実務2～5年)
1・2・3級造園及び園芸装飾技能士(受験資格2年次在学中～実務7年)
造園科及び園芸科職業訓練指導員(受験資格実務3年)

- 測量工学科(1年) <平成11年4月新設>
測量士補(卒業時無試験取得)
測量士(実務2年無試験取得)
土地家屋調査士(二次試験免除・一次試験のみ受験)

学校法人 **明倫館** 理事長 上條 勝也

〒187-0044 東京都小平市喜平町2-1-1

資格取得と就職に抜群の実績

建設技術者教育の総合専門学校

設置学科

取得資格



建築工学科

(2年制/80名男女)

- 1級建築士/実務経験4年で受験資格取得
- 2級建築士/卒業時受験資格取得
- 1級建築施工管理技士/実務経験5年で受験資格取得
- 2級建築施工管理技士/実務経験2年で受験資格取得
- インテリアプランナー/実務経験4年で受験資格取得



土木工学科

(2年制/120名男女)

- 測量士補/卒業時取得(国家試験免除)
- 測量士/実務経験2年で取得(国家試験免除)
- 1級土木施工管理技士/実務経験5年で受験資格取得
- 2級土木施工管理技士/実務経験2年で受験資格取得
- 土地家屋調査士/2次試験免除



造園土木工学科

(2年制/40名男女)

- 1級造園施工管理技士/実務経験5年で受験資格取得
- 2級造園施工管理技士/実務経験2年で受験資格取得
- 2級造園技能士/実務経験1年で受験資格取得
- 車輛系建設機械運転技能者/在学中取得



測量工学科

(2年制/80名男女)

- 測量士補/卒業時取得(国家試験免除)
- 測量士/実務経験2年で取得(国家試験免除)
- 土地家屋調査士/2次試験免除
- 補償業務管理士/実務経験6年で受験資格取得



測量科

(1年制/80名男女)

- 測量士補/卒業時取得(国家試験免除)
- 測量士/実務経験2年で取得(国家試験免除)
- 土地家屋調査士/2次試験免除

製図科

(1年制/40名男女)

- 2級地図製図士/卒業時取得(社)日本測量協会認定
- トレース技能検定/在学中取得目標



札幌理工学院
専門学校

北海道知事認可校

建設大臣指定校

建設大臣認定校

(社)日本測量協会認定校

〒069-0831 北海道江別市野幌若葉町85-1

(011)386-4151

本部(財)全国建設研修センター



平成10年11月30日発行©

編 集	『国づくりと研修』編集小委員会 東京都千代田区永田町1-11-32 全国町村会館西館7階 〒100-0014 TEL 03(3581)2464
発 行	財団法人全国建設研修センター 東京都小平市喜平町2-1-2 〒187-8540 TEL 042(321)1634
印 刷	株式会社 日誠



国づくりの研修

財団法人 全国建設研修センター